



9
60

94-605



柏井園著

大阪
明
道
館

遠景

明治
42 1 8
内交

緒 言

一其の折々に書きたる文章を集め、一巻の書となして世に公にするは余の未だ爲さざりし所にして、今之を爲すは敢て自信あるがためにあらず、主として出版者佐々田勝重君が人のため道の爲めに圖つて忠なる志に深き同情を有すればなり。且之によりて多少自ら保留したき念なきにあらざる舊稿を保留して讀者諸君の清覽に供するを得るは大なる幸なり。

一此の巻に收むる文章は時々の問題に關せず、又専門的研究に屬せざる種類のものにして、主として讀書靜想の餘に成れるものより採りたり。書窓遠景の名ある所以なり。一「開拓者」「福音新報」の發行者が、余が兩誌に載せたる文章を後に用ふることを諾せられし厚意は深く謝する所なり。

明治四十一年クリスマスの前週

柏

井

園

目次

ブシ子ルの宗教的經驗………	一
ダンテ傳の興味………	二二
水街の説教者………	四〇
英雄時代の夢………	五八
十字架の力………	六五
活ける説教………	六九
再觀の妙味………	七三
新約聖書に對する遠近法………	八一

學生生活に於ける宗教	………	九七
清貞純潔の理想	………	一一二
日記中の自然	………	一二五
手織著物の時代	………	一三三
イーストルの喜び	………	一五一
近世思想と罪の觀念	………	一六〇
ガリバルダイの片影	………	一七三
昔と今	………	一九二

書窓遠景

ブシチルの宗教的經驗

柏井園著

米國の宗教思想の産物のうちにてホーレース、ブシチルの著書は
余を感動せしものならず。近世の宗教家の傳記にしてブシチルの
傳記の如く興味を以て讀みしもの稀なり。余は今茲に彼の傳記を叙
せんとするにあらず。又その神學思想を紹介せんとするにあらず。

たゞ彼の傳記の精華にして神學の淵源なる宗教的經驗の一斑を語らんとす。

ブシチルの誕生百年期は今より六年前（千九百二年六月）に紀念せられぬ。彼世を去りてより正に三十の星霜を経たり。思想界の變遷急激なる此の三十年間に於て其の思想の幾分は陳腐に歸するも亦自然の數にして、特にダルウインの『種の起原』の出板より一年の後に成りたる『自然及び超自然』中の辨證論の如きは今日多くの點に於て其の力を失へり。然れども彼の書には此等の時代思想の動搖の影響を被らずして永久に其の價を維持すべき精金美玉のあるなり。贖罪論に關する書籍のうちブシチルの『代贖的犠牲』ゴナイケリヤス・サクリフ・アリスの如く新

鮮なる思想と富瞻なる教訓を一部のうちに含めるものあるべきや。彼の説教集も亦多くの人の永く愛讀する所とならん。之に加へてブシチルを識らんとするもの必ず讀まざるべからざるは其の愛娘メリイ、ブンチルのものしたるブシチル傳なりとす。チイ、チイ、マングアの著したる小きブシチル傳も亦讀むに足る。これ等の傳記に表れたる宗教的實驗の開發し行く跡を辿りてその實驗の成果なる神學の著書を研究するは甚愉快なる業はあらず。

ブシチルはその自傳的斷片の中に記して曰く

此世界に於ける余の形象は大なるものなかりき。然れども余は大なる經驗を有したり。余は曾て大なる煽動者たりしとなく、

未だ曾て機線を操縦して人心を收攬せしことなく、曾て典雅なる事をなせしことあらず。余は殆んど全く如何なる集會の議長或は副議長に擧げられしことなく、又た委員となりしことなき所以は、上に言へることの爲にはあらずして、人余を見て一個の奇物シンギユラリチイとなし、多分全然健全ヤインならぬこと多しとなせる爲ならん。世間實務の面に於て余の成せしことの報告を取つて之を視れば皆無なり。余は何等の地位を占めざりき。然れども生くるてふことさへ余に取りては大なる事件にてありき。特立したる個人的なる生活の種類に於て余は曾て書かれ又將來書かるべき史詩エヒツクよりもより大なる史詩を演じたり。余が行路の小轉折も

皆これ大なる變化にてありき。余にして我が師表の如き微妙なる技術を有し、彼が余をして踐ましめたる活劇の移り行く光景を示し得たらんには、噫是れ何等の歴史なるぞ、救ひの歴史なり其の以上の歴史なり。

プシテルの宗教的經驗は實に一個の連続したる劇の如く、其の轉折分明にして驛程歴々として尋ぬべし。何人も良く思ひ良く進歩すれば彼の如くなり得べからざらんや。たゞ靈感穎敏ならず、思を致すこと深切ならずして之を自覺し得ざるのみ。プシテルの經涉したる思想の驛程の縮圖とも稱すべきもの彼が一八六一年(六十歳の時)の正月其の妻に與へたる書翰の中に見るを得べし。

未だ會て機線を操縦して人心を收攬せしことなく、會て典雅なる事をなせしことあらず。余は殆んど全く如何なる集會の議長或は副議長に擧げられしことなく、又た委員となりしことなき所以は、上に言へることの爲にはあらずして、人余を見て一個の奇物シンギユラリチイとなし、多分全然健全セインならぬこと多しとなせる爲ならん。世間實務の面に於て余の成せしことの報告を取つて之を視れば皆無なり。余は何等の地位を占めざりき。然れども生くるてふことさへ余に取りては大なる事件にてありき。特立したる個人的なる生活の種類に於て余は會て書かれ又將來書かるべき史詩エピックよりもより大なる史詩を演じたり。余が行路の小轉折も

皆これ大なる變化にてありき。余にして我が師表の如き微妙なる技術を有し、彼が余をして踐ましめたる活劇の移り行く光景を示し得たらんには、噫是れ何等の歴史なるぞ、救ひの歴史なり其の以上の歴史なり。

プシケルの宗教的經驗は實に一個の連続したる劇の如く、其の轉折分明にして驛程歴々として尋ねべし。何人も良く思ひ良く進歩すれば彼の如くなり得べからざらんや。たゞ靈感穎敏ならず、思を致すこと深切ならずして之を自覺し得ざるのみ。プシケルの經涉したる思想の驛程の縮圖とも稱すべきもの彼が一八六一年(六十歳の時)の正月其の妻に與へたる書翰の中に見るを得べし。

余は弟子たることは如何なることなるか、又殆んど總ての基督教的實驗の主調實キリストにここにあることを今の如く分明に觀じ得たこと無し。余は此の礦穴に於て最後の發見を爲し得たりと思ふなり。最初に余は社交的に又我が本性に潜める無明の宗教的本能の力に因りて神に關する經驗の第一歩に導かれたり。第二に余は正義の原則に聯關して基督と神につきて透明なる道德上の光明に進みたり。第三に基督と基督に於て表れたる神につきて内部的個人的の發見の途に就けり。而して今や第四に善なる神の代贖的性格てふ絶頂の事實を捉へ又之を自得するに至れり。

彼の宗教的經驗は鬱勃たる功名の念を懷いて大學の學窓に學びたる青年の時に始まり、頭に霜を戴きたる齡に至るまで、彼の所謂弟子たるの精神を以て新しき進境を開拓せり。我等をしてこの長さ信仰の物語の一端を傳ふることを得せしめよ。ブシテルは一八〇二年四月十四日を以て米國コンチカット州のバンタムと云へる一小村に生れたり。父は農夫にして農業の傍紡績の業を營めり。新英州初代の殖民の純粹なる血を傳へ、父母ともに信仰厚く母は此の子を神の業に獻じたく祈願せり。ブシテルはかかる田舎に於て健康活潑なる幼時を送り、村校に學ぶ傍には父母の業を助くるに忙しかりき。廿一歳にしてエール大學に入り廿五歳にして卒業せり。此の間の生

活を彼は後年淡泊に告白して曰く『大學に於ける余の成績はあるべきだけ良好ならざりき、特に初に於て然りしが次第に良くなりて相當の成績を以て學校を卒へたり。然れども余の宗教的品性は下降せり』と。大學を卒業して後の數年間彼は不定なる有様にて過したり。卒業後學校の教師となり、次に紐育の或る商業雜誌の補助記者となりて殆んど一年間之に従事し、それよりエールの法科に入り六ヶ月間法律を學び、其後太平洋岸の新開地に赴き身を政治界に投じて功名を成さんと志せり。然れども彼自ら知るよりも更に良く其の子を知れる母の之を憐ばざるが爲に志を決行するに躊躇せるうち、エール大學より助教たるべき招誘を受け母の意に順ひて之に應ずることと

なれり。之より二年間學生を教ふる傍法學の研究を續け行くは代理人とならんと希望し居りしが、業成らんとする間際に彼の生涯に一大變化起れり。一八三一年の冬エールに一大リバイバル起りて滿校を震撼せしめしことあり。獨立心強きプシテルは初めは相關せざるものの如く己の地歩を占めたりしが、茲に大學に於て彼を崇拜して萬事其の指導を仰げる數人の青年ありき。プシテルは此等の人の爲に此のリバイバルに對して如何なる態度を執るべきやを決せざるべからず。之を決する爲に彼は一夕同志の青年と大學の一室に會合せり。評議せんために集まりし會合は祈りと涙の集會とはなりぬ。プシテルも此の夕より全く變じたる人となりぬ。己を頼みとせ

る此等の同志に對する責任の一念は彼を導きて意外にも爰に到らしめしなり。義を見て之を爲し、正しと知りて之れに就く勇らしき道義の念は彼の一生を動したる樞軸とはなりぬ。彼は他年『疑惑の解釋』と題する説教の中に婉曲なる文辭を以て自己の經驗を告白したる一節あり。

世界は空虚に見え人生も亦空虚になり行くを感じたり。其の人は全く飢ゑて靈魂は八方に向ひて麩包を求めぬ。友人も之に満足を與へず。其の歩は重く曳かれ日々太陽は昇らずして只だ擧がるなり。一種鉛に似たる色は世界を包めり。終に一日己の室内を逍遙するうち忽然として一個の疑問は發りぬ「されば我が

信ずべき真理とは全くこれあらざるか。否茲に一の真理あり。善と惡との差別即ち其れにて、其れこそ我が會て疑はず又疑ひ得べしと思はざる所のものなれ。これ我が充分に確認する所なりと。斯る中次の問題は發りぬ「果して然らば我は正氣の大法を我が律法となしたりしか。我は人の正しと云ふ正しき事は之を爲せり。されど我は正義の大法に此の身を投じ其の我に要求する所の全般に副ふことを爲せしや。否我は之を爲さざりき。意識的には爲さざりき。噫こゝに我が爲すべき或るものあるにあらざるや……」と。此の暗示は一種の天啓なるかの如く思はれ、之に由りて生ずる確信を感知するとは一の安心なりき。彼は云

ふ「さらば我は祈願せん、若し神あらば（我は神有らんことを望み又臆ながら之を信ず）その神は義しき神なるべし。我れ悪しき故に彼を見失ひしならば、恐くは正義のうちに之を見出すならん。彼を我を助けて、幸にして我に現れざらんや」と。今や決断の瞬間は來れり。彼は跪きて臆に感知したる臆なる神に祈るなり。正直ならんために臆なるを告白し今より義しき生活を始めんことを祈るなり。

寄宿舎の一の小さな寢室に宿りたる一條の物語をば、記録を司る天使は必ず之を埋没せしめざらんことを我は神に祈るなり。

プシチルは哲學的の冥想に依て神を見出したるに非ず又美なる趣味の縁に牽かれて神に到りしにあらず。男子らしき責任の念とおこそが嚴なる道義の精神に動かされて宗教の根底に觸着せるなり。プシチルの宗教思想の脊骨となれるは強烈なる道義の精神なり。プシチルの神は徹頭徹尾道德的なる神なり。其の人生觀は人格の尊貴てふ思想にて充滿せり。彼は人生の尊貴を感ずること強かりしため、猿や人形の如き人間の戯畫とも云ふべきものを見るを惡むこと甚しかりしと云ふ。

此れプシチルが自ら宗教的經驗の第二程と稱したる「正義の原則に聯關して基督と神とにつきて透明なる道德上の光明に進みたる」

實驗の次第なりとす。吾人をして今歩を進めて第三の驛程に近かんとするに當り再び彼れの傳記の「スケッチ」に復らしめよ。

ブシナルは其の轉心の結果として政治家たらんと欲する志望を擲ちて身を宗教の事業に献ずるの決心を爲せり。されば一八三一年エールの神學科に入り、二年の勉學の後ハートフォルドノースヨルチの北教會の招聘に應じて説教者となり後按手禮を受けて牧師となり三十歳の時より、五十七歳にして健康を損じ其職を辭する時迄此の一教會の牧師として一生の最良の部分を費したり。彼が新しき宗教上の眞理を感得したるはハートフォルドに赴きてより第十八年のことなり。彼を啓發してこの新しき思想經驗の天地に入らしめたる近因少くとも二

あり。一は其愛兒の死なり。彼は今や結婚して三人の兒を擧げぬ。一八三七年に一人の愛する女兒を喪ひ、同じ年に生れたる男兒も五年の後死せり。彼は一人の舊友に語りて云へり「余は我が男兒の死せし以來、實驗的宗教につきて今迄の全生涯に於て學びしよりもより多くを學びたり」と。彼がその後一年間歐洲を漫遊して新しき思想の空氣を呼吸し水平線の濶大になりしとも亦新生面の開かれし他の近因ならん。斯かる變化多き經驗の間に積水淵を成して蛟龍生ずる機會を孕みつゝありしなり。一八四八年の二月其の日は來りぬ。此の經驗につきては余はブシナルを知ること最も深き彼の半身の筆に成れる文章を其の儘に引用したき念禁する能はざれども、長くな

るを恐れて其の大意を摘載するに満足せざるを得ず。

二月の或る日朝早くブシチルの妻は眠より起くるや、其夫が長く待ち望みたる晨の來りしとを語るを聴きぬ。妻は『何を見たまひしや』と問ひしに、答へて曰く『福音』と。ブシチルは己の靈的生涯の一轉機として永く此の日を記憶し、友人と語るとき幾度か其日の心情に語り及べり。二十三年の後一夕妻との物語の中に話頭再び年を経し當日の回顧に復りて云へり『余は基督教的的生活に就て甚しく律法的ならざりしかど、此の時一部分の見識、瞥見、疑惑より神と其インスピレーションにつきて一段明なる知識に移れり。余は此の知識を全く喪ひしとあらず。この變化は即ち信仰に入れる變化なり』

ど。ブシチル自身が他の所に言へる言を以て此の信仰の何物なるかを解釋するを得べし。曰く『信仰は汝に神を與へ、汝に神を充たせて直接なる實驗的の知識を得せしめ、彼のうちにあるすべての物を有せしめ、彼の特質を以て汝を包圍せしむ』と。

『神に於ける基督』の一書は此の新しき實驗の果實として生れたり。

清雅なるハートフォードの公園はブシチルの設計に委ねられしやで都市の公事にも關係して其意見は尊敬を以て傾聴せられ、教會員は親に對する如き濃なる愛情を以て彼れを敬慕し、其の妻子ともに彼の心情を解し彼を助くるに足り、春風家に満ちし二十八年間の生

活の間にも心勞苦悶はなかく、少からざりき。彼に對して起されたる異端征伐の騷動は爰に言はず、晩年彼を苦めたるは肺と心臓の弱きより起れる不健康なり。彼が病を養はんため時々遠近に漫遊したる旅行先より其の家族に贈りたる書翰の如何に惻々たる情緒に充てるよ。終に一八五九年の七月告別の説教を爲して牧師の地位を去れり。斯の如くにして社會の活動より退きつゝ、ありし間にも心靈的活動は更に生氣を減せず。新しき天地は層々其の眼前に開展しつゝ、ありき。同じ年の正月一友人に新年の祝辭と共に書き送りて曰く「余は基督の事業につきて、より良き觀念を與ふる爲に或る事を成し得る日の近きを思ふ。爰に遺されたる大なる原野あり、余は恩恵

と健康を與へられて之を充たしたく願ふ」と。其後二年を経たる正月其妻に贈りし書翰に曰く。

此の二年の間卿の知る如く其の形様のために苦心しつゝありし其の廣大なる境界に於て事物は幾分か形を成しつゝあり。余は創始的なる天來の思想に因りて基督者の經驗のため代贖的犠牲の一書を成さんとす。然して之れに先ちて（時に於て先つにあらず順序に於て）犠牲の教理につきて一卷を著し、第一卷第二卷として別に之を發刊せんとす。第一卷は之を「基督にある代贖的犠牲」と名づけ、他は「信者にある代贖的犠牲」と云ふ如き名を付せんか。

余はその第二の條につきて新鮮愉快なる晨の静思をなせり。昨
 曉起き出づる前二時間に亘り此の主意を思ひ續けて余が心情の
 生活に於て他の大なる層階に入りたりと思へり。(下略)

これより猶五年の練熟を積んで後一八六六年『代贖的犠牲』の一
 書は世に現れぬ。即ち著者六十四年の時なり。

余は最早ブシチルの著作の冠冕とも云ふべき此の大著の趣意を紹
 介すべき餘地を有せず。又之を爲すは此の一文の本旨にあらず。た
 だ夫れ此の偉人が其の秀絶なる思想の天才を宗教的真理の開拓に用
 る、層一層光明の天地に尋ね入り、深く學び長く思ふて止まること
 を知らず、道を窮めて老の至るを忘れたる高尚なる精神、高尚なる

生涯に至りては幾分か之を示し得たりと信ず。

『代贖的犠牲』の成りて後年を経て後更に之れを補ふべき他の側面
 あるを曉りて別に一書(今は「代贖的犠牲」の第二巻として出版せらる)を著して之に加へ、晩年
 更にインスピレーションの問題に關して思を凝らし一書を著さんと
 語りしが之を成すに及ばず僅に断片の思想録を止めて一八七六年七
 十四歳の高齢を以て、更に新しき真理の光明に接すべく此の世界を
 辭しぬ。

ダンテ傳の興味

『詩聖ダンテ』と云へる書出でたりとて、さる友の來り示されければ、便ち取りて通讀す。今や我が文學界の一面は彌々亂調子となりて、怪しき快樂主義を鼓吹する書籍の屑や、責任ある筆者もなく徒になまめかしき表装もて俗眼を牽かんとする雜誌の紛々として出づる時に當りて、著者上田敏氏のごとき篤學の士ありて斯の如き聖高なる大文學を讀書社會に紹介せられしは慶ぶべきことにして、著者の勞亦多しとするに足れり。此の書に於てダンテの『神曲』地獄篇より天堂篇に到るまで一々章を逐ふて其の梗概を示しあれば、原詩若

くは他の歐文の良譯を讀むべき便無き人のためには良き手引なるべく、又近世の註解の書目など丁寧で紹介せられたるも研究者の爲に便利を與ふることなるべし。楮子輩は敢て此の書の批評をなさんとするにあらず。この書の出でしに因みて聊自らこの詩聖に教へらるる一二の節を語らんとするにあれど、試に先づ素人の目より視て此の書に對して備るを求むる點を擧ぐるも亦不可ならざるべし。書中比較的に整へりと思はるゝは、『神曲』の梗概と略解の部分にして、其他は一致せる結構を缺くと云ふべく、同一事にして數章に重複せること少からず。これは蓋し著者の序文にある如く舊作の文章に新に書き添へられたる章を綴り合せたるが爲なるべく、整然たる一個

の著述とせんためには猶ほ多くの剪裁増訂を加ふることを要すべし。然れども文章の點より云へば著者の舊稿の留め置かれしを以て却て幸とする者なり。『神曲序説』『地獄界の二絶唱』の二章は蓋し數年前の稿なるべく、研鑽未だ精緻ならざる所はこれあれども、文章概して暢達透明にして詩人の風神をしのばしむるに足るものなきにあらず。著者近日の作と見ゆる部分は予輩の目より見れば文章寧ろ邪逕に入りつゝあるにあらずやと思はる。之を著者の『耶蘇』に比して文品や、下れるを覺ゆ。其の文辭に細工を費すと餘りに多く、所謂清新の造語を列ねんとして却て煩縟に流れ、文致の自然を失ひ、寫さんとする題目其ものよりも字句の末に讀者の注意を亂さるゝこ

と頻々たり。譬へば彩畫せられたる硝子を隔て、富士を望むに似たり。讀者は硝子の模様の細ならんよりは寧ろ其透明ならんことを望むなるべし。著者今に於て大に懊めずんば不可なり。又此書に惜む一事は詩人の傳記に於て疎畧を極むるとなり。固より斯の人が世に留めたる重なる紀念は即ち其詩にして、生涯の事實の傳はるもの至て乏しと雖も、乏しければ愛重の念彌々深からずんばならず、著者は『飄零の後半生もどより興味ある傳記なれど、求めて達せざりし靜寧のあとを追ひて諸侯に客たりし逐客の起居を數へむより寧ろ『神曲』に影うつせる内部生命の史をたどるに如かざるべし』とことばりあれども、さりとして例へば詩人が如何なる罪科を負はされて逐客と

なりしか、將た如何にして何處に死せしか等の重大なる歴史の大凡をだに語らざるは『詩聖ダンテ』と銘うてる書としては不親切なりと謂はざるべからず。然れども著者にして其れらのは初學の徒には必要もあるべけれ、苟くも此の書籍かむはどの人これしきのこと知らずではと答へたまは、予輩復た何をか云はん。著者「わかきダンテ」「わかきダンテの學殖」より一躍して『神曲』の序説に移れども、ダンテの内部生命の史に於て觀るべき節は多く其の中間にあるにあらずや。清艶なる『新生』の作者が堂々たる『神曲』の作者となるまでの間の境遇の變遷、又別けてこの間の苦心、誘惑、煩悶、發達の機微なる節々は、我等が深厚なる同情を注ぎて點檢すべき所にあらず

や。之を『神曲』の中に求めば、地獄篇の第二歌など心機一轉の消息をもらして味深き處なるに、他の章に比して猶ほ簡短にして僅々七行を以て叙し去られしは予の甚だ失望したる所なり。要するに上田氏のこの書は詩人の文辭に専らにして、活ける人物としての面目を寫す所甚だ疎なり。其の原因何處に伏せるか。これは本書の結構にもよるべきが、其主なる原因は著者の思想經驗の弱點に發する所多からん。ダンテを解釋する枝折は趣味よりも道念なり敬虔の念なり。宗教的の實驗なき人に向つてダンテの正當なる紹介を望むは無理ならずとせず。予は敢てダンテを知れりと云はんや。たゞ平素この詩聖につきて思ふ所を語るべし。

ダンテの『神曲』の第一行に曰く『人生の途半なかはにして暗き森蔭に我れ迷ひぬ』と。知るべし、彼の詩は人生行途の半に於ける經驗を歌ひたるものなるを。我等がダンテより學ばんと欲するは實にこの深き經驗にあらずや。雲雀の如く青春の晨に歌ふ若き調べ美しからざるにあらず。鳥の將に死なんとして其聲の哀しさが如く凄凉たる人生行旅の夕暮の詩思悲壯ならざるにあらず。然れども詩は娛樂にあらずして人生の批評なり教訓なり慰藉なりとせば、活世界の戦正に耐なる間より歌ひ出づる詩人の歌最も耳を傾くべきにあらずや。蓋し少年の夢漸く薄く現實界の味轉た苦さを覺ふる時にあたり、稚心既に脱して洗練を経たる理想の所在を示し、新鮮なる情感を喚び起す

の力は宗教と詩を外にして何處にか求むべき。然も單に天才の發露に任せて吟咏するの詩人之をなすの力なく、『此にあらざる劍にふれて汝泣くべし』との境涯を経たる詩人初めて能く之をなし得るなり。然してこの類に屬する詩人を解し又紹介するの事業は浮薄なる誇學の士に許されずして、涙に濕ひたる麵包を食ひしことある人に與へらるゝなり。宗教的の敬虔に兼ねるに現世の鍛練を以てして初めてダンテの衷心に同情を表し得るものとなるべし。マヂニイの言を聽け『ダンテが山間の道院を音づれて、君何の求むる所かあるとの問に應じて平和と答へたる其の情景は人をして橄欖山頭にて天の父に祈り心の平和と献身の力を與へられんことを求めたる、總ての殉教

者の永遠の模表たる人を想はしむ』と。グラッドストオンの如き亦ダンテの門弟たるを甘じたる一人なり。彼千八百八十二年十二月の日記の中に記して曰く『ダンテを読むことは一個の快樂たり勉強たり課程たるに止らずして、心情と勢力と人物の爲に強き訓練なり。予が七十三歳に垂なんなんとする今日まで一生の旅路を歴來たれる間、僅少なながらも携へ來りたる心の蓄積の大部分はダンテの學校にて學び得たるものなり』と。

詩人が九歳の時春の祭に斯の人のまだ幼なく清らけき姿を見てし日より、清純高潔なる戀情は下行く水のいや深く澄みて『君の爲にとて俗なる群を離れぬ』と歌はしめしベアトリチエは人に嫁ぎて後久

しからずして他界の人となりぬ。これ詩人が二十五歳の時なりしと云ふ。詩人の意中の人^が他人の妻となりしことは彼の詩文の中には絶えて之れを記さず、但此婦人の父なる人が、書き置きし遺言状の中に、バルデイの妻なる我が女ベアトリチエに若干の黄金を分配すべしとあるによりて僅に證せられ得べく、又ダンテが此の婦人の容色風情につきては、其眼の眞珠の色なりしことの外更に記す所無きを見て、其情緒の高潔にして含蓄深かりし一斑を見るに足らん。人事常に人情に副ひ難く斯の人遂にかくなりぬ。春波驚鴻の影を留め難く壞壁空しく古麝の香を餘せり。目を擧ぐれば一天寂寞として山河復た舊にあらず。宿昔の幻影は杳として逝きぬ。ダンテ是に於

て悵然としてエレミヤの哀歌を誦して曰く『あゝ、哀しいかな古昔は人のみち／＼たりし此の都今はさびしき態にて坐し寡婦のごとくなれり』と。夫れ人生の大なる打撃は愛情の絃斷絶したるに如くはなく、大なる誘惑は青年の理想夢と消えたる際に乗ず。今やダンテも此の危機に於て幾分か迷ひたるもの、如し。『神曲』の中に淨罪界の坂を登りつめし山の上にて靈化せるベアトリチエと再び相見し初め、ベアトリチエがダンテを責めし言に曰く、『暫しは我れ若き眸を注ぎて彼(ダンテ)を支へ正しき道に向はしめしが、我次の世の闕越えて變りたる生命に入りて間もなきに、はや我を捨て、心移ろひぬ。肉より靈の界に上りぬれば、我が美しさも又徳も彌や増せしものを、

思ひきや彼には貴からず快からずなりたるにや、眞ならぬ道に歩を枉げて頼むかひなき姿を逐へり』。これ固より高さ理想に照らして己を責むると嚴しき詩人の告白なれば、彼が行の太しく亂れたりと解するは不當なるべしと雖も、詩人の生涯の轉機を尋ねんためには、見落すべからざる一節なり。情界に於て頓挫したる彼は力を知界に展ばさんとせり。戀の人は一變して研究者となり、詩の絃線は一度斷えしもの、如く乾燥なる散文的の道を辿りぬ。兀々としてポエテヤスやシセロの書を読み煩瑣哲學の問題に頭腦を苦しめたり。彼は哲學に向つて慰藉を求めたるなり。求めて之を得しや否やを知らずと雖も、斯かる時代を經由するは彼の大才を成すが爲に必要なり

しなるべく、他日の大建築の資料として用ひらるべき石材は此の年月に於て切り出されつゝありしなり。何時までも青年時代の浮華なる詩趣に戀着して、一步を進めて組織ある大思想に訓練せられ根本的問題に觸着せざる人は、遂に人を教へ得ざる人なり。ヴォオルツウオルスが『プレルード』の篇に於て自ら叙せし如く、『然かれども幾程もなく我が心を引き締めて或る一定の目的に献げんものをどの熱切なる願望は發りぬ、讀む時も又思ふ時も』と云ふ如き一念發起の時期は大なる思想の人に必ず無かるべからざる時期なり。去れよ花の如く華麗なる情思、來れ砂の如き乾燥なる思想、此砂と見ゆる思想は早晚火の城壁の如き『神曲』を築き立つる材料と化せんとす

るなり。學や、成りて一代の風雲と燃ゆる功名の念はダンテを驅りて青雲の梯を攀ぢしめぬ。或は戈を執りて戰場に驅馳し、或は黨争の渦中に身を投じて縦横の略を揮ひ、傍らルチーソニス文藝復興の春を飾りたる曠世の才人名匠を友として藝術の園に遊び、三十五年の時遂に志を得てフロレンスの最高官なるプリオルの椅子を占むるに至りぬ。ダンテは今や人生得意の絶頂に達したり。非凡の材器を以つてこの壯快なる時代に際會したることなれば、理想の眼界は廣く開けて、經營せんと期せる事業は限りを知らざりしなるべく、以太利統一の夢も亦彼の腦裏に往來せしなるべし。希望湧くが如く理想の旭日は行く手の山の頂を照らせるなり。然れども見よ彼處に豹又獅子又狼は

行かんとする道に横はれり。此れ地獄篇の第一章に書き起したる光景にあらずや。此等の猛獸を假りて表されたる放慢と野心と貪婪の敵はダンテの肉を啖はずんば已まざらんとす。終に千三百二年即ちダンテが三十七歳の春彼が羅馬に使せる留守に於て、誣ゆるに瀆職の罪を以てして重き罰金と二年の追放に處し、其後二ヶ月を経て更に召喚に應せざる罪に問ひて見當り次第火刑に處すべきことを宣告したり。これより後二十年の間浪々として漂泊の人となり、苦き他人の麪包を食ひ、高き他人の階を昇るの身となりぬ。昔は『ヒタノオバ新生』篇に於て歌はれし少年時代の理想の碎くるに泣き、今は『モノルキヤ王國論』に於て理想を叙したる現世の經綸亦夢となりぬ。ダンテは是に至りて何處

に理想を尋ねんとするか。これ實に大苦戰なり、千鈞の重みを以て彼の一身を壓倒せんとする失望、倦怠、怨恨、自棄の念と戦ひて悠悠たる永遠世界の平和を心中に感得し、現世に於て失ひたる理想を不朽の世界に於て収めたる其の大精神、之をしも勇氣と云はずんば何をか云ふべき。夫れ大理想の立つ時小き理想も之に和して生動す。願ればベアトリチエが死せしもはや十餘年の昔となりぬ。其れより後幾度か身世の浮沈を閱歷し、詩人の思想も亦幾多の變遷を歷たり。去る者日に疎く杳として隔世の感あるべし。然れども旅客高山の頂に登りて頭を回せば、雲井のよそに隔りたりと思ひし故郷が圖らずも某山某水の影鮮に見渡さるゝ如く、有りし昔の人の面影は今や靈

界の莊嚴端麗なる光明を纏ふて現れぬ。此時『血の一滴としてふるひ
 躍らざるなく、いにし昔の炎の跡未だ消ざりける』。はるくど恐し
 き地獄の道を辿り嶮しき淨罪界の山路を攀て路窮まらんとする處に
 て、見れば東方の空薔薇の色を染め天使の手より散さるゝ花の雲の
 間より、振分髪の昔初めて相見たる日の装に似たる紅の衣に緑色の
 上衣を重ね雪の如き面帕かほほのしたる天女の姿浮びたる光景はこれ即ち詩
 人半生の經驗に外ならず。寂しかりし天地は是に於て復た春の色を
 呈し、人の運命の榮枯盛衰浮沈の道理、其間に隱約たる攝理の金針
 までもほのかに觀せられつゝ天地も人生も歌ふべきものとなりぬ。
 晨の如き理想の光に導かれて逢遇せる人生の事實を點檢し、千古不

朽の浩音を傳へたる『神曲』は終に成りぬ。(明治三十
 五年三月)

水街の説教者

サムエル、ハドレーの一生

ニューヨーク市にて土曜日の新聞紙を読むものは、日曜日ハ
説教會の廣告を載せたるペーヂの一隅に必ず左の廣告を見出すなら
ん。

デエリイマコーレー傳道會ウォーターストリート(水街三百十六番)。毎
夜午後十時より、日曜日は午後三時より集會あり。何
人にて來會を歓迎す。醉漢は最も歓迎す。

ウォーターストリート水街とは如何なる處なるぞ。これブルックリン長橋を往來

する人の脚下に見下すべきニューヨーク市中最も不潔なる、最も暗黒
なる、夜間は誰しも一人にて往來するを避くべきはと危険なる場未
なり。「デエリイマコーレー傳道會」とは此暗黒なる界限に基督の光
を照らすべく、醉漢や悪黨や無宿者を相手として單純なる福音を説
き且つ應急の救助を與へつゝある三階造りの一小家屋なり。或は旅
行者が、獨逸のケルンに幾百年を費して建築せられたる大會堂と雙
べ稱して世界に於て最も鞏固なる二の教會なりと云ひしはこの傳道
會なるなり。此處に説教せるものは誰ぞ。これ余が今其の傳奇的な
る一生を物語らんとするサムエル、ハドレー其人なり。

斯の人二十年間の間斷なき勞苦を終りて今や天上の休息に招かれ

ぬ。『誰か憐れむべき我が無用漢のために盡しくるゝものぞ』とは彼
 が去る二月九日(明治三十九年)忽焉として死せし際に遺したる最後
 の一言なりしとぞ。彼が三年前に著したる『ダウン、イン、ウオータ
 ー、ストリート』は、其の自傳とも云ふべき書なるが、第十二版に
 は牧師チャプマン氏が其の葬式にて爲せし説教をも附載しありて、
 一層感動を深からしむ。請ふこの單純なる書中に寫されたる驚くべ
 き歴史を語らしめよ。

サムエル、ハドレーは今を距ること六十四年前オハヨー州に生
 る。父は米國東部の生れなるが少き時活計の道を需めて此の地方に
 移住したり、子六人ありてサムエルは其の末子なり。父は鹽礦を所

有して採掘に従事せしが、一八三七年の商業界の恐慌の爲に事業に
 失敗し、サムエルが四歳の頃森林の中に移りて開墾に従事すること
 となりぬ。當時其のあたりは全く未開の土地にて住民も多くは丸木
 小屋カビンに住へり。ハドレーも寝ながら屋根の透き間より星の光を仰ぎ
 見、冬の夜は顔に雪の降りかゝりしとや、狐や梟の鳴き聲を聴きつ
 つ眠りし幼時を記憶せり。かゝる田舎にも丸木小屋の小學ありてハ
 ドレーは四ヶ年間通學したり。母は、米國が産み出したる最大の神
 學者の一人にて學徳一世に卓出したるデヨナサン、エドワードの正
 系より出でしほどありて、其の人品其の信仰ともに人並勝れたる婦
 人なりき。身分良き家に生れたれば爲慣れぬ業にてありながら子供

を相手としてかひなくしく立ち働さぬ。朝夕の家族の禮拜は之を懈らす。家族のもの、寢臺の外に説教者を宿すべき寢臺をも設けありて、かゝる人々の來り泊することあれば、爐火温なる邊り珍客をうち圍みて道を聽き四方山の新聞を聽きて夜のふくるを忘れしと云ふ。

母は膝の上にてハドレーに祈を教ふるとき幾度か『愛らしき兒よ、御身は何時までも酒をな飲み給ひぞ』と誠めぬ。子は母の顔を見上げて『母上よ、私は決して酒を飲むまじ』と答へたり。ハドレーは此清く樂しき家庭に生ひ立ちて十八歳の時までには全く酒の味を識らざりしが、其の頃より漸く年長の友と交り、競馬仲間の交際も多く

なりて、自からも一匹の馬を飼ふほどになりぬ。かくて相識りし一人の友相應の商人なるが、此の邑に來りしとて一夜途中にて邂逅せり。其の人既に酔ひ居りて手に火酒ウホスキイの一壺を携へたり。其の夜は美しき月夜なりしが共にどある處に坐して、一杯を傾けんことを強ふること半時間。ハドレーは斷然之を否みしに、其の友云ふやう『君我どともに飲まざるは我よりも以上の人なりと思ひ居るが爲なりと見做すべし』と。此の一言を聞くやハドレーは憤然酒壺を取りて之を傾けたり。彼自ら其の時の心持を語りて云へり。

此の生れて初めての一飲は全く余の全生涯を變じ了りぬ。十分間のうちに余は魔鬼に捕へられたりと思はれたり。余が今まで

絶えて味ひ知らざりし思念は續々として叢り起れり。噫此最初の一飲の結果として直に生じ來りし耻辱よ罪よ苦惱よ。

此の後日ならずして其の母は死ねり、我の子の立てし約束を破りしとは知らで死ねり。六ヶ月を経て父も跡を逐ふて死せり。ハドレーは醫學を修行せん爲近村のさる醫師の弟子となりしが、此の人醫者としては得難き人なりしも酒癖あり、ハドレーも其の門下にあることなれば飲酒の習慣彌々増長して遂には酒の上の過より業未だ成らずして去らざるを得ざることとなりぬ。それより全く學問を放棄して職業的の賭博者となり十五年を過ごしぬ。晝夜酒にひたりたれば身の行末の事も深くは考ふることもなかりしなり。かくて一八七

〇年西部を去りてニウヨーク市に來りぬ。一人の兄は南北戦争の功にて大佐まで進み、今はニウヨーク市の實業社會に良き地位を得たる故、ハドレーは其の周旋にて一月三百弗の收入ある職を得たりしが、幾くもなくして會社の倒産のため此の地位を失ひぬ。それより彼は詐偽を行ひ、窃盜をなし、手形を偽造しぬ。法律の網は其の周圍に張られたり。身の置き處なく宿し居りし家の窓より飛び下りて自ら果てんと思ひしこと幾度かありしが、目に見えざる手は常に彼を引き止めたり。斯くて一八八二年四月十八日の夜彼はニウヨーク市中の或る酒店に坐せり。售るべき品は售り盡して、食せざること數日、四日は夜なく悪夢にうなされて眠ること能はざりしな

り。悄然として獨り酒樽の上に腰かけて二時間を過せしが、

忽焉として我は或る力あるもの、現在を感ぜたり。當時は何者とも知らざりしが、後に至りて其が罪人の友耶蘇なることを知れり。愛する讀者よ余は死ぬる日まで此時怖れながら見たる光景を忘るゝと能はず。我が罪惡は火の文字もて書かれて壁上を匂ふかと思えたり。余は身を回して他の方を見たるにこゝにも亦同じものを見たり。余は亡びたる罪人が悔改めず又赦されずして神の臺前に立つ時見るべきものを見たりと信するなり。余は今や死なんとすこれ其の前兆なりと想へり。酒店に在りし他の客も蓋し然か思ひしならん。

死ぬるならばせめて酒店の庭にて死にともなし、此の上酒を飲まぬうちに死にたしとは彼の最後の願なりき。是に於て彼は猛然として酒店より走り出でぬ。入口の扉砕けんばかりの勢にて。然して平生此世にて最も怖ろしく思ひし場所なる警察分署に行きて監禁せられんことを願へり。警官は恠んで其の故を訊しぬ。答へて曰く「我は再び酒を飲まずして死に得ん所に置かれんことを望む」と。願は聞き届けられたり。かくて監禁せられて一夜を過せしたるレキシントン街、東百二十六丁目の警察分署の一室はハドレーが人生の正路に履みかへりたる第一の驛舎とはなりぬ。彼は爾來二十年間其月其日には必ず其の監室を音づれて昔の恩を懐ひイエスと交るを常と

したり。其の夕彼は冷き石床の上に跪きて初めて『神よ罪人なる我を憐み給へ』と祈りたりしなり。此の監室を出でて後兄の家に往き親切なる介抱を受け數日間床に臥せしが次の日曜日の朝起き出で此の日を以て一身の運命を決せんものと念ひつゝ、種々の方法を考へたりしが、遂に墮落仲間なりし一人の者の勸に従ひニウヨーク三十二丁目のヂェリイ、マコーレー、クレモルン傳道會に行けり。

ヂェリイ、マコーレーは一八三七年愛蘭に生れ十七歳の時米國に來り祖母の手に育てられ、窃盜罪を犯し十九歳の時十五年半の禁錮に處せられたり。獄中にて説教を聞きて悔改し熱心に同囚に傳道したる結果として獄中にリバイバルを起し、特赦せら

れしが、出獄の後再び墮落して水上の窃盜とまでなり果てたり。然るに一夜泥酔して家外に打ち倒れ居たるに、小冊子を配布しつつある一人の宣教師が其の路を遮りたる無禮なる婦人に向ひて『御身はイエスを識るや』と問へる語耳に響きて、嘗て愛して今忘れたるイエスを懐ひ出だし、之より罪惡の鐵鎖と苦闘して終に全く新なる人となれり、悔改後四年を経て己と同じ罪惡の底に沈める人々を救はんために有志者の贊助を得て開きたる傳道所はこれ即ち水街の傳道會なり、十年の後マコーレーは水街の傳道會を己が導きて信者となせし一人に委ね。三十二丁目にクレモルン傳道會を創設したり。クレモルンの名

は醜行の魔窟として知られシクレモルン園のありし跡に建てられしに由來せり。

余は昨年（一九〇五年）五月十五日の夜クレモルン傳道會の第二十三周年紀念會に列し、弊衣の垢臭を帯べる來會者の堂に滿てる中に雜り、雙手を展べて我に來れと招ける基督の畫の外殆んど何等の飾なき講壇に立ちてサムエル、ハドレー氏が此の席に於て初めてヂエリイ、マコーレーを見、其の力によりて悔改たりし始末を語るを聽きぬ。二十三年前の昔ハドレーも同じ席にて同じ種類の聽衆の間に坐し、ヂエリイ、マコーレーの悔改の實驗を語るを聽きしなり。其後幾百度聽きても常に新に覺えし此の實驗談を聽くうちハドレー

は『我も或は救はるべきか』と思ひ初めたり。其より二十五人の悔改めし罪人の立證ありて後マコーレーは熱心に祈りて其の終に曰く

愛する救主よ我は十四年の昔櫻岡にて醉漢チエリイヒルなりしに、汝は我を救ひ給へり。イエスのために此等の憐むべき醉漢を救ひ給へ。

跪きながら彼は歌へり

みめぐみあふるゝ

イマヌエルの

ちしほのいづみに

つみをあらへ

幼少のとき我が家の夕の禮拜にてうたひ慣れたる此の讚美歌を聞きて深き思を催す折りしもマコーレーは近き來りて銘々自から祈らんことを勧め其の手は遂にハドレーの頭の上に置かれぬ。彼の心臓

は鼓動せり。『我は祈ること能はざれば君我がために祈りてよ』とて
 辭したれども『君自ら祈るにあらずば全世界の祈りも君を救はざる
 べし』と云はれ終に勇を鼓して『愛するイエスよ汝は我を助け得る
 か』と祈れり。其の時の心情を語りて曰く、

其の時まで我が魂は言ひ難き暗黒を以て充たされしが、今や我
 が胸中に白日の光の煌々として照り輝くを感じたり。我は自由
 の人たるを感じたり。安全、自由、イエスに任ずる感情の貴さ
 よ。基督その愛と力を以て我が生活に來りたるを感じたり。

我は街の上に立ち出でて空を仰ぎぬ。過去十年間我は仰ぎ視して

とありと信せず。醉漢は常に俯して歩む、決して見上ぐること
 あらず其の夜は見事なる星夜なりしが、イエスが千萬の眼もて
 我を視給ふと覺えたり。

イエス明に我に言ひ給ふと覺えたり『我が子よ、我が爲に勤め
 よ。若し能く我を識りだにせば我に來るべき數千の人あるな
 り。汝往きて彼等に告げよ。』

此の轉心の後殆んど二年前の辛苦を経て後ハドレーは一個年二千
 五百弗の收入ある好地位を得たりしが、水街に於て我が前半生と同
 じき境遇に沈淪せる人の爲に傳道するこれ畢生の使命なりとの一念

の断ち難きものあり。數日間心を籠めて祈りたる末心を決してこの事業に身を献ずることゝなりぬ。

これより二十年間彼が經營したる事業につき、彼のために救はれて立派なる人となりし多くの感動すべき物語につき、余は茲に之を語るの餘地なきを憾とす。

彼は氣象明快にして音聲雄爽、人をして自ら之に親ましむる力あり、又人心を觀破する慧眼あり。教養ある人物の間に立ちて尊敬を受け得べき氣品あり。然して親切熱烈なる慈愛は所謂憐むべき無用漢のために燃えぬ。チャプマン氏の演説の一節に曰く『余は彼と俱に或る惡評ある家に入り、彼が墮落したる少女の頭上に手を置き潜

然たる涙の彼を見上げたる少女の顔にかゝるを見し時、余は靈魂をアソシエ思ふ熱情の何ものたるかにつきて新しき觀念を有するに至れり。其の夜別るゝに臨み我が手を握りしめて云へり『噫、噫、如何なれば人はかくまでに神を忘るゝを得るか』。喪はれし者を尋ねて救ひ給ひし基督の心は活きて此の人の裡に活動したるなり。

英雄時代の夢

余は京都及び鹿兒島に開かれたる青年學生の集會に臨まんがために三月(明治三十九年)の末東京を發して京都に至り、務を終りて更に西行の途に上りぬ。山陽九州の山光水色を迎へ送りて肥後の三角港に於て汽車を下り、汽船に乗じて水俣港に渡り、こゝより前時代の遺物なる乗合馬車に乗り肥薩の界なる山路を越え、十二時間を費して吉松の停車場に出でて再び汽車に乗り、月明の夕櫻島の山影を左に見つゝ鹿兒島に入れり。未だ兩京の櫻の開くを見ずして行きしに薩南の春は早や漸く老いて城山の新緑櫻花に代りぬ。こゝに集れる九州の青年と起居を偕にして愉快なる三日を過したる後歸途に上りぬ。

京都の地は余に取りて縁故淺からざる地なり。記憶力の最も柔なる時代の四五年を過したる地なれば。されば鴨河に枕したる昔ながらの一旅亭に泊して、頼山陽が錯認水聲爲雨聲と咏じたる淙々たる水聲(東京には此の聲無し)を聴き、同志社の門前に立ちて彼の腕白なりしトム、ブラウンがラグビーの舊學窓を音づれたる一節に『彼は氣おくれして人に見らるゝことを怖れ裏路を取れり』とあるを懐ひ、日曜日の午前同志社の會堂の禮拜に列り壇上に懸れる故新島總長の肖像を仰ぎて初めて此の會堂に入りし日曜日氏が恩人ハ―

デー氏の記念の説教を爲し聲涙俱に下るの概ありしことを懐ひ起しぬ。青年會部會の開かれたる神學館の一室に於て今は盲せる畫家久保田米僊氏(すでに故人)が大磯なる新島先生臨終の枕頭にて寫したる數幅の畫の掛れるを見て「吉野山花咲く頃は朝な朝な心にかゝる峰の白雲」の古歌を誦して其の多事なる一生を送られし夕をしのびたり。はや十六年の昔となりぬ。人去り世は移りて時勢は幾度か變じ、宗教思想も進歩したり。當年氏を崇拜して古來の英雄の群に加へたる其門弟さへも今は冷き批評の眼を開きて昨非今是を悟るものあり。先生にして今日まで存命することありとするも果して一生の光華を維持し得たるべきや、其の事業を益々盛ならしめ得たるべき

や、多少の疑ひなきを得ず。それに係らず猶當時の事が霞を隔て、東山を觀るが如く一種の歴史的詩歌的色彩を帯びて觀せらるゝは何ぞや。之につきて聯想せらるゝは岩崎谷に骨を埋めたる西郷南洲翁の面影なり。淨光明寺の墓石既に苔色を帯びぬ。三十年の間國家の歴史は大發展を爲し、七十萬の大兵を滿洲の野に動かしたる今日に比べては八萬の官軍四萬の薩軍が九州の一隅に戦ひし局面の小なるは云ふまでもなく兄弟牆に鬨ぎたる愚寧ろ哀しむの外なし。然るにその無意義なる内亂が日清戦争にも日露戦争にも之なき一種の風情を以て回顧咏懐せらるゝは何ぞや。余は南洲翁の時代が明治年間に於ける英雄時代ヒーローック・エーザなりし如く、新島氏の時代が明治の基督教史に於

て一種の英雄時代ヒーローックエーガなりしと云はんとす。余は此の二人が果して未來を洞見し一代を指導するの大識見ありしや否やを知らず、然れども其性格は一種の偉大なる所あり、赤心の人を動すものあり、其門弟子のために役せられて猶眞價を損せざりし大器ありしを信ず。之あるが爲に門弟子の或る者は時に師よりも大なりと自負しつゝも猶ほ一種の力に引着せられて利害得失以上の或る理想を鼓吹せられ、眞マコトの人に遭ひしを感じて、鼓舞傾倒禁する能はざるものありしなり。其理想や單純なり、夢幻的なり、複雑になり行く時代の風雨には堪えざるものなり。新島氏の没したる頃峰の白雲は既に風となり雨となりて英雄時代の花を散らし初めし時代なりき。かくて單純なるカ

ルビン主義の神學を以て日本を救はんとせし基督教の英雄時代は、征韓の一舉によりて再び維新の志氣を回復せんと夢みたる英雄時代の去りしに遅るゝこと十三年にして惶あやなだしく過ぎ去りぬ。然れども日本國民の士氣は之とともに亡びざるなり、日本の基督教は之とともに亡びざるなり。余は同志社の一室にて開かれたる青年の集會に臨み、又西南戦史の末葉に其名を見出すべき吉野山の頂、錦江の水鏡の如く黄葉の野鹿を布くに似たるを瞰下したる處にて教友とともに祈りし時十餘年の昔とは別なる調子の基督教の生長しつゝあることを感じたり。日本の基督教はたしかに進歩しつゝあるなり。然れどもホームー詩中の英雄時代の夢が希臘文明の行路に伴ふて一種の色彩

を點せし如く、日本の基督教の初代に於て單純なる理想に鼓舞せられ國家の救を任じて起ちし青年の氣意は長く餘香を後世に留めしめたく思ふもの余輩のみにあらざるべし。

十字架の力

米國より來りたる電報はデヨン、ワトソン氏の訃音を傳へたり。彼は英國長老教會派の有名なる牧師にして又文學者なり。イアン、マクラレンなる彼れの雅號は『美はしき^{ボニイ、フリヤ、フツン}荆叢』等の宗教小説によりて讀書社會に喧傳せられたり。過ぐる頃より米大陸巡遊中なりと聞きしが、如何なる病に罹りて何處に死せしやを知らず、洵に惜しき人なり。之に付きて思ひ起さるゝは此人とマシウ、アーノルドとに關する逸事なり。マシウ、アーノルドは晩年縁付ける娘を訪はんとてリバプールに滯留せしが、日曜日の朝娘に伴はれてジョン、ワトソン

ンの牧したる會堂に來れり。ワトソンの其日の説教は十字架の力てふ題にて、彼は先づ一の物語を語れり。さる伊太利の山里の會堂にて禮拜の最中激烈なる地震は起れり。其處は天主教の會堂なりしが司祭は祭壇の中に立てる十字架を指し會衆を麾きて曰く、いざ昇り來りて十字架にすがり給へ、死なばこの十字架を離れずして死なんと。會衆は招かるゝまゝに壇上に集まれり。折しも大なる震動來りて轟然たる音して會堂の天井は會衆の席上に落ちぬ。人々盡く難を免れたりと。之に始まりて十字架の救を説きたるワトソンの其日の説教は情深く意到れるものなりしが、説教も終り『我れ驚く可き十字架を思ふ時に』(When I survey the wondrous cross) と云ふに始ま

れる壯嚴なる讚美を歌ひて禮拜は終りぬ。アルノルドはワトソンに近き來り手を握りて感謝して後家に歸りぬ。午餐果て、後親しき者とどもに散歩すべく一室を出でて階を降り來る時會堂にて歌ひたる『我れ十字架の驚くべき愛を思ふ時』てふ讚美歌を低唱しつゝありしといふ。それより心靜に野山の路を逍遙せしが父トマス、アーノルドをたふしたると同一の病急に起り幾くもなく世を去るに至れるなりと。この一條の物語をばワトソン氏親しく、プリンストン大學の教授某氏に語り某氏は之をホール博士に語れりとして余は過る日之をホール博士の口より聽くを得たり。果して然らば宗教の趣味を存して信仰を失ひ、宇宙の間正義に向ふ傾向ありとの信仰に止まりし

マシウ、アーノルドも其一生の終りに於て正義の傾向以上なる驚くべき愛に心を動かされ柔けき犠牲の燈を瞥見するを得たりしなり。ましてワトソン氏はより明なる十字架の光明を望んで、人死して書長く存する人の中に加はりしならん。(明治四十年五月)

附記——余は明治四十年三月ホール博士より此の話を聞きしが一年の後即

ち本年三月二十五日博士は東洋にて獲たる病の爲に世を去られたり。今舊

稿を校するに臨み悲悼た深からざるを得ず。

活ける説教

人が精神の力に因り、信仰より出でたる精神の弾力に因りて、如何なる程度まで物質の束縛を打破し境遇を征服し得べきか、近頃此の世を去りし二個の人物の生涯は之を實現せる活ける説教なり。

其の一人は本月十四日(明治三十九年十月)築地に於て病死せる監督シエレンシエウスキイなり、彼は亡國波蘭の人なり。壯にして米國に移住し宣教師となりて支那に來り明治七年監督に擧げられしが、明治十四年中風症に罹り身體の自由を失ひて米國に歸らざるを得ざることをなれり。爾來病床に横臥せる二十五年を如何に用ゐし

ぞ。始めの十五年は僅に用ゐる得る右手の中指を以てタイプライターを便りに聖書の漢譯に従事し羅馬字を以て之を印刷せり、後の十年は遙々日本に來り漢字印刷を監督するに用ゐられたり。一昨年業を卒へて今までの漢譯に勝ること數等なる漢譯全書全部を刊行せり。記者の如きこの漢譯を參考して益を受けつゝある一人なり。本月上旬引照の記入を終りしが一週間を出でずして七十五歳の齡を以て眠に就きぬ。

地の一人はスコットランドの盲目牧師デョーヂ、マセソンなり。彼は年正に二十歳エヂンボロ大學の學生として勉學せる最中疾を得て全く盲目となれり。然れ共彼は不撓なる精神の力により非常なる

勤勉により四十年間大なる教會の牧師として大なる事業をなせり。『保羅の靈的發達』『基督の面影の研究』等多くの有益なる著述をなして宗教界に一大光明となれり。彼自ら曰ひし如く『あらゆる運命の門戸に遮られて猶屈するを肯せず、夜に捕へられて猶晨の來るを望み、其一生は束縛せられ制限せられながら、限りなき活氣と消し難き希望の生活を送り、』本年九月世を去るに至れり。ロポルトソン、ニコルは之を評して、實力より云へばチャルメル博士以來蘇國に與へられたる最大の人物なりと云へり。

境遇の意の如くならざるに失望する人、或は健全なる身體を有しながら勤めざる人此等の偉人の驚くべき勝利の生涯を見て奮ふ所な

かるべけんや。

再観の妙味

先づ二三の例を以て説明せん。旅客の大平洋を渡りて亞米利加、歐羅巴に遊ぶもの桑港もしくはシャトル港に上陸してこゝに忽ち大陸の土を履むや建物の大なる市街の整頓せる、夜街道の明るきことなどに目を驚かさざるものなし。去てシカゴを觀、ワシントン、ニウヨークを觀るも何となく其光彩の初て觀たる大平洋岸の都會に勝るもの少きが如く感せらる。然れども若干の月日を過して後再び西に向ひて歸るならば、初めて沿道の都會の田舎とみて規模の小なる到底大西洋岸の大都會と同日に語るべからざるを知らん。

初めて面白き書を繙くとき、清新の興湧いて盡きず、所謂手の舞ひ足の踏みを知らざる感あり。青年燈下に三國志を読み、ブルタークの英雄傳を読み、カアライルの英雄崇拜論ヒーロー、ウォルシツプを読み、さきの愉快は永く忘れ難からん。再度之を読み三度之を読むに及んで最初の印象は多少新奇を失ふことあるべきも、さきに朦朧たりしもの透徹し、着想の順序脈絡漸く露呈して津々たる滋味初て湧く。スポルジンはボスエルのデジョンン傳を百回通讀し、倫敦の牧師モルガンは聖書の或る一卷を講説する前少くとも五十回通讀する例なりとかや。『靈的の事は繰り返しに因りて力を失ふものにあらず反て強烈を加ふ』と蘇格蘭の老博士デヅ井ドソンの云へるは洵に至言なり。

自然を観る亦之に同じ。ウォルツウオルス嘗てチンターン寺院アペイに近きワイ河畔の風景を賞し、眷々として忘れ難く五年の後再び行いて遊びぬ。彼が絶唱中の絶唱として名高き『チンターン、アペイ』の篇はこの再遊の感を歌へるものなり。蘇東坡が後赤壁賦に『歲月幾何ぞ江山復た識るべからず』と云へるなどは異にして、五年の星霜を閲して失ひし所のあるを悲むとともに得し所の更に大なるを喜び、縦し清新は減ずるとも豊熟の滋味更に深くなり行くを欣び沈痛なる樂觀を發揮したり。

總ての眞理は再觀なり。透視パルズベクチャー法なり、眞價の再評價なり。

之を畫の面に觀れば街道の松却て富士山の頂よりも高く見ゆるこ

となり。然れども松の富士より大ならざることは幼稚園の小兒も猶能之を知る。天上に點打てる星の或るものは月より幾十倍の大きさを有することに至ては學んで後初めて之を知るを得べし。形而上の事物に至りては輕重大小の辨識し易からざること之に超ゆること萬萬なり。人生こゝに於て惑あり。煩悶あり、俗論あり。獨り卓見明識の人出でて、平面的に觀られたる人生を立體的に觀せしめ、常識や虛榮心を標準として附したる價格を一變して、比較的に物の真相に照合したる價格を付す、今日の小文學者小小説家の人を誤る所以は、彼等は讀者を導きて、顛倒迷錯したる彼等の小天地に入らしめて益々人生の真相より遠からしむるがためなり。大なる文學者思想

家宗教宗の爲す所全く之に反す。

基督教觀は再觀なり。耶蘇の世に在り給ふ時弟子は固より其の薰陶に接して大なる變化を経験したりと雖も、耶蘇の人格と教訓の餘りに大にして意想の外なる事多きがため、其の歸趣、其の端緒、其の中心點を模索するに苦み、據て以て全體を觀望すべき見點を發見する能はず、其學び得たる所支離滅裂の感なりしならん。然るに耶蘇十字架に死し又復活するを見るに及びて、弟子は初めて大なる秘密を解くべき鑰を見出し得たり。一の見點に到着し、こゝより頭を回せば、今まで要領を得ざりし耶蘇在世中の言行も今更に思ひ當る節

節多く、更に之を舊約聖書の光に照らし觀れば、明瞭火を見るが如く、之を掲げて天下に訴へて疑はざる確信こゝに立ちぬ。基督を識ること明になるに隨ひて神につき靈魂につき世界の成行につき今までは全く別なる光を以て觀、別なる價格を以て判斷することゝなりぬ。

基督者の生活の歷程は斯くの如きものなり。心に感觸する光に邂逅すれば、この新らしき光に照らして再び眼界の内に在る全局面を點檢す。是に於て事物の價値の判斷漸く正鵠を誤らざるに幾くなり行くなり。自己を省察するに當りても我の見たる我を以て、神の見たる我に近づけんと欲す。故に自ら責むること嚴なるとともに又

所謂自己の心を食ひまでに一圖ならざるを得るなり。自己の身にあり弱點、病氣、過去の失敗などパウロの所謂肉體の刺さへも祈りに和げられたる光に照らして再觀し來れば、必ずしも刺にあらずして我を驅りて一步を進ましむる拍車たること多きを悟らん。一卷の聖書を携へて林の中に歩み入り、こゝにて見出したる聖語一句により、縦し心の雲霧は霽れ渡るまでに至らずとも、潤ひたる心を以て、碎けたる魂を以て、即ちイエスの教へたまひたる斷食するとき頭に膏を塗り顔を洗ふ如き丈夫の苦衷を以て人生の試験に堪へ得る私密を教へらるゝことなり。十字架の宗教以外何ものか斯の如き經驗を與へ得るものぞ。

七寶燒の仕上げらるゝまでの順序を示す標本を觀たることあり。夫の驚くべき色澤の燒き出ださるゝまでには再觸三觸、七八以上に至りて初め成るクリスチヤン基督者の思想生活の色澤亦かくの如くにして豊潤の域に達するなり。

今日世間に流布せる思想を見るに、他に取るべき點ありとするも、此類の妙味乏しく、説く者熟思せず、學ぶ者熟讀せず、其の弊滔々として人の子を誤るもの多し。

新約聖書に對する遠近法

東京神學社第一回卒業式に於ける講話

余が今『新約聖書に對する遠近法』と題して語らんとする所は、格別に研究の結果を發表するといふほどのものにあらず。此の短き講演の目的は大部分實際的にして此處にある學生諸君特に又卒業生諸君が更らに進んで聖書を研究し又其の眞理を人に説くの一助とせんとするに在り。而して以下語らんとする如き事は必ず學者の既に之を詳説せしものなるべしと雖も、薄識にして未だ之に逢ふことを得ざるが故にたゞ平生感に浮べる數點を總合排列したるに過ぎず。

遠近法若しくは透視法、英語にてパースペクティブと稱する言は

種々の意義を有せるものなるが、書圖に關して言へば平面に畫きたる畫圖をして觀るものに立體的の感を起さしむる方法を云ふなり。遠近法は獨り畫圖に關するのみならず建築、歴史、人事等種々の領分に應用せられ、他の言を以て説明し難き事實も此の思想によりて説明せらるべきもの多し。故に本題に入るに先ち大體遠近法は何の爲に必要なるか。又遠近法には何が必要なかを語らんとす。先づ遠近法は事物を了解する爲めに必要なり。例へば十里を隔てたる山脉を望むに筍の皮の如く相層累して殆んど一の平面に在ることし、然れども其間には川あり村落あり一里二里乃至四五里を隔つるものあるを忘るべからず。書籍に於ても亦然り。一卷の創世記イザヤ書

注意せずして之を讀む時は、一人の人の筆によりて書かれたる如く思はるれども、其實は或章と或章との間には幾十年乃至幾百年を隔つるものある事は歴史的研究の光に照らして明白なる事實なり。新約書の如く多くの人の手に成り多少異なりたる傾向を代表せるものを輯めて成りたる書籍に於ては、之を總合して統一せる感念を得んが爲めには其の脈絡を追尋し遠近本末の差別を立てざるべからず。次に或る思想或る事實を他人に説き表はさんとするに當りても亦遠近法に注意する必要あり。我等の思想は我等の目と同じく燒點は或る一點に限られざるを得ず。或る一點は最も鮮明に我が視覺に映じ此の中心を離るゝに従ひ明瞭の度を減ず。我等の宗教思想も亦然

り。我が信仰經驗の度に應じて明に感ぜらるゝ點あり又朦朧たる部分あり。明に感じたる部分は明なりとして之を語り、朧に感じたる部分は朧なりとして之を語る。近山は濃く遠山は淡く、近帆往くが如く遠帆座するが如し。見たるまゝを語るによりて聞く者も亦現實に接するの感を以て之を聞く。保羅の如き確信の程度を明にすることを忘れざりき（哥前七〇二十五、四十）。要するに語る者と題目との距離を明にして知るを知るとし知らざるを知らずとす、これ眞の遠近法なり。眞の遠近法にては未熟を忌まずして不眞^{アンリナル}を忌み、常套^{カント}を忌む。余は今日の説教に於て遠近法の十分に注意せられざるを惜む。總ての部分濃彩を用ふるが故に多少割引して聽かるゝ弊を

生ず。第三に遠近法は我等が實際生活に處する上に必要なり。ローウエルはオリバア、クロンウエルを論じて歴史的遠近法を解したる人なりと云へり。其の意は小なるが如く見ゆるも實は遠くして大なるものと、大なるが如く見ゆるも實は近くして小なるものを差別して之に處する處置を誤らざりしを云へるなり。悲しきかな我等の心は目前の物に昏まされて物界の事徒に大に靈界の事微に小さく考へらる、我等は屢々理想の翼に駕して時代と隔離せる處に立ちて展望の眼を放たざるべからず。一人の婦人、基督に高價なる香油を注ぐ、當時の人の目より見れば微々たる一小事なり。然れども基督は百年千年の後に其の見點を置き『天下いづこにても此の福音の宣べ傳へ

らるゝ處に此の婦人のなし、事も言ひ傳へらるべし』と云ひ、壯麗の極みを盡せる宮を見ては其の没落の慘を豫言したり。すべて人は他人の我を見る地位に立ちて自ら批評し、又後世の人の見たる所、否神の見たる所より我を見る事に於て僅に俗陋の境を脱し生活の趣味單調たらざるを得べし。

遠近法を正しくするに必要な條件三四を擧ぐるを許さるれば、余はまづ正直と獨立てふことを擧げんとす。我等が距離を観測し得る所以は兩眼の角度の異なるより生ずることは人の知る所なり。左右の眼和して同せざるによりて我等は距離を知ることが得。二人が同一空間を填充し得ざる間は精密に同一なる見點あるべき理なり。

し。人は自己特有の見點に對して忠實ならざるべからず。或人曰く Be yourself 此れ講壇に於て最も人を動かす秘訣なりと、蓋し至言なり。第二は修養訓練なり。ド、クインシーの文章の中にこれあり、遠近法を學ばざる人に、極めて普通なる光景例へば道の兩側に家の列びたる遠望を畫かしめよ。其人が畫に於て畫工が此結果を生せしむるに用ふる方法を注意したることあるにあらずば、少しにても眞に近く描くを得ざるべしと。我等の網膜に映じたる映像をそのままに寫せば完全なる遠近法をなすことを得べけれども之を爲すまでに其の道の人に就きて長き練習を積むを要す。我等は自ら知るよりもより良く知れることあり。基督のゲッセマテの苦、十字架の死、其の

意義は我等の宗教思想の網膜には存外に正しく映せるものをもち、之を知識思想に寫し取るに當りて眞を得ざるのみ。靈的遠近法に達するため必要なる以上の條件は猶ほ一を加ふることを得ば、それは深き經驗なりと思ふ。深き井に入れば白日星を見得べしとかや。遠く見んと欲せば先づ深く入るべし。希伯來の豫言者やパウロや黙示録の著者やアウガスチンや其の遠識活眼は深き信仰と經驗によりて開かれたるなり。

之より本題に入りて新約聖書に對する遠近法の一斑を語らんとす。新約書に對する遠近法といふよりも新約聖書の中に存する遠近法と云ふ方穩當ならんか。

先づ基督の教育に就きてこの事を説明せんに基督が弟子を教育せらるゝにつき感せられたる困難の一は弟子が餘り基督に接近し過ぎたる地位にありしことこれなり。すべて大なるものを觀んとせば必ず多少の距離を隔つるを要す。繪葉書なれば手に取りて見るを得べけれども油畫の大幅はしさりて之を眺めざるべからず。駿河臺の希臘教の會堂はお茶の水橋より見るよりも九段坂上より望んで其の宏大なるを見る。基督に親灸して日々其の薰陶を受けたる弟子は非常なる特權を有したるに相違なしと雖も亦我等の有せざる不利を有したり。即ち彼の一言一行の驚くべく慕ふべきものを見得たりと雖も、全體として彼を觀するに不利なる地位に立ちしなり。故に耶蘇

は云へり『我が往くは汝等の益なり』と。之は他の偉人に對しても幾分か同様なる事なるが、之に加へて基督に就きて特別なる一の箇條あり。即ち我と基督との間に加へて初めて基督の人格を考へ得べき一事が猶ほ未來に屬して其事實が基督と彼等との間に立てるにあらずして、基督と其事實との間に彼等の立てる事これなり。其は即ち十字架上の死と復活にして、基督は幾度か豫言によりてこの事實を示し、又十字架の後にある見地より耶蘇の人格を解釋せしめんと勉められたる弟子等は之を爲す能はざりしなり。然してペテロを初め十字架を見ざる前の弟子等が得たる最初の解釋はイエスはキリスト即ちメシヤなりと云ふにあり、メシヤと云へるは純然たる希伯來

的思想にして地方的の色彩濃厚なる言なり、要するに天より遣はされたる王者なりとの意なり、ペテロは猶太的の衣を着けたる解答を與へたり。未だ十分なる解釋にあらざるに係らず基督は心より満足して之を稱賛せられたり、是れ彼等に適合したる度合に於て見たる所を正直に告白したる言なればなり。然らば何故基督は王者なるか如何なる意味に於てメシヤなるかと云ふに至りては耶蘇の意識と弟子の信仰の間に非常なる懸隔ありき。ブシチルの云へる如く『彼等は耶蘇の一生の事實と印章を活かし得べき見地、彼の人格に關する見點に達せざりき。彼はメシヤなりと思へどもメシヤは何人なるか又何人たるべきかに至つては微弱なる觀念を有したり。彼の人格の

觀念未だ捉へられず、其の結果として弟子等の行爲はたゞ不思議なる事物の粗雜なる混合なりと思はれたり。然るに十字架がいよいよ事實となるに及び耶蘇の人格を解釋すべき一の新しき見點を見出したり。たとへば湯本に於ては富士を見るを得ず國府津大磯に至りて函根の山の上に富士の立てるを見る如く、カルバリーの十字架邊に立ちてメシヤてふ山の上に、人の爲に苦しむ救主てふ山の頂を表すを見たり。然れども此兩者の關係に至りては未だ正しき遠近法に達せず。人の爲に苦しむ救主なるが故にメシヤなり王者なりと云ふよりも、苦しむたるに係らずメシヤなりと信じたるが如し。然して此の兩者を繋ぐべきものを基督の復活昇天に見出しぬ。思へらくイ

エスは苦しみて死にたれども王者たるを失はず、復活して天に昇り神の右に擧げられたるなればなりと。基督が天に屬するもの神の子たることは十字架の死てふ困難を填め合すものとして見られたり。この思想は使徒行傳の初めの數章にて代表せらる。此の時に當りて保羅は出でたり。保羅は特別なる召命天職を自覺し、獨立の見地よりして基督教の解釋に達せんと力めたることは彼が回心後三年までペテロ、ヨハネ等を訪はざりしこと又『彼の名あるものより我は受けしことなし』と云へるによりて明かなり。彼が己の實驗により又神の靈の啓導によりて達したる遠近法は又頗る獨得なるものなり。十字架の死てふことはポウロに取りては説き去るべき困難にあらず

して思想の中心となれり、然して基督の神の子たることはこの困難を填め合すべきものにあらずしてこの中心の基礎となるべきものなり。イエスは何故王者なるか、人に代りて人を救ひたればなり。彼の苦は何故人を救ふ力あるか、神の子なればなりと。メシヤてふ山の上に救主てふ高峰は聳え、救主てふ高峰の上に更らに永遠に存在する神子てふ絶頂は聳ゆ。これ保羅の見たる光景なり。時より云へば保羅の思想はペテロの説教よりも基督に遠し。時に於て遠しと雖ども意に於ては近しと云はざるべからず。この遠近法を思想の中に加ふれば耶蘇の福音と保羅の福音との相違と見ゆる事も解釋し得べき點多きを見る。例へばヴェルンの如き兩者の差別を高調し「十

字架と復活と天より降りたる神の子これ保羅の基督論の三大新説なり。耶蘇の福音に於ては殆んど全く之を欠く」と云へるが遠近法に長せる著者も此の點に於ては餘り平面的に新約聖書を觀たるを免れざるべし。湯本に於て富士を見ざるが故に江の島より見ゆる富士は眞實ならずとは云ひ得ざるべし。

今や保羅の時を距ること千八百年餘、保羅も亦遠近法を用ゐて觀せらるべき對象の一となりぬ。我等の視覚は保羅の視覚と同一ならず。保羅の目には明なりと思はれし事にして我等の目には微に小さく見ゆることもこれあらむ。然して保羅の解釋したる基督教の福音の力と價值を判識し驗證するに於て我等は保羅よりも一層利益あ

る見地を占むる所なしとせず。千九百年間の歴史の證明は我等の有する所なればなり。此間思想の路幾度か轉折したるに係らず、保羅の高調したる十字架の贖、罪の赦、現在せる基督の福音が依然として思想の水平線上に屹立するを見るならば、これ何を意味するか。是の如く我等は我等の立てる特獨なる見點を適當に認識する事により、一は聖書の大なるを知りて猶更に謙ることを學び、一は勉めて已ますんば幾多の發明する所あり貢獻する所あるべしとの希望を抱くに至らん。

學生生活に於ける宗教

近世歐米の偉人にして學生生活に於ける宗教を説きたる者の中、余輩の多少知る所ある人を擧ぐれば、ヘンリー、ドラモンドは其の一人なり、トマス、アルノルドは其の一人なり、「カーヂナル」ニウマンは其の一人なり。歐洲大陸の學者及び米國の教育家のうちにも其の人少からざるべし。然れども此の種の人物を列擧し評論するは此の文の目的にあらず、但だ巨人の權威を藉りて學生生活に於ける宗教は如何にあるべきかと云ふことにつき若干の點を顯はさんとするにあるが故、坐右に其の良き傳記を有する以上三人につきて語る

を以て足れりとせん。

ヘンリー・ドラモンド（一八五七—）が其の高潔なる品性と不思議なる磁力と透明なる解説力を以て蘇格蘭の青年學生の間に基督教の精神を鼓吹するに當り、先づ心を用ひたる一事は、宗教に對する熱心と學生として平常の義務を重ずる精神と兩立せしめんとしたることなり。彼が宗教的運動の主導者たるべき學生を選ぶ必要ある時に於ては必ず之を學校の成績良好なる者のうちより採れり。路傍演説は如何なる種類の人が之を爲すべき者なるやとの間に答へて、仲間の中最良の人物にして初めて之に當るべしと云へり。彼がまだ青年時代に自己の傳道運動の實驗に原きてもものしたる『如何に青年の集會を

指導すべきか』と題する一文の中に、青年の爲に開く集會は夜九時より十時までを以て最良の時間なりとし一時間にして必ず閉會すべしと注意したり。これ一に學課に忙しき學生に出席し得べき便利を與へ、又此の種の運動に盡力する青年も亦學業に於て人後に落ちざらしめんとの用意に出でしものなり。これ甚だ卑近なる事柄なれども、注意を値せずんばならず。教會に於て或る青年が單に大學生たる故を以て或は單に學業優等なる故を以て分外に重せらるゝは忌むべき事たるとともに、不勉強なる學生や其の儕輩の間に於て重を置かれざる青年が教會或は青年會に於て牛耳を執るを許すは人を誤るものなり。然して日曜日以外の集會に於ては成るべく閉會の時間を

豫定し之を勵行して、豫定の勉學に故障少からしむることを得ば學生のためには幸ならん。

ドラモンドは又青年の宗教は宜しく青年らしき宗教たるべきことを説けり。故に青年の爲に開きたる集會には婦人の入ることを謝絶せり。此の一事も亦今日の我が國に於て多少の注意を拂ふ必要あるを感ず。今日一般の青年の趣味が纖弱に傾き女性的になり易き時に於て、青年即ち男子の青年に適切なる宗教の趣味調子を習養するの頗る必要なるを見る。一例を云へば今日多くの男子の青年の愛誦する讚美歌は、一種の新體詩の如き穢麗なるもの多くして、莊重深沈の調べ大會堂を震動する如きものに對する趣味に至りては未だ十分

之を解せざる恐れなきや。要するに、各自の宗教に於て正直なれ、眞率なれ、適切なれ、模倣するなかれ、獨自一己を發揮せよ。是の如き宗教にして初めて生命あり進歩あり。

次にドラモンドは學生に向て如何なる宗教を説きしや。彼は生長力を説けり進化の福音を説けり。如何にして生長し進化せんか、高等なる天性によりて劣等たる天性を征服することによる。マルチノオの云へる如く高等なる天性が劣等なる天性に服屬するこれ即ち罪なり。罪は人を誘ふ。誘惑せらるゝによりて人は生長するなり。誘惑は勝を得る機會を與ふればなり。學生生活の危機何處に存するや。彼等の肉身は數千年の古物なり、彼等の精神は生れて二十年も

立たざる嫩き精神なり、此嫩き精神の力を振起して舊き物質を撃破せよ。如何なる力に依りて之を爲し得べきか。完全なる人、進化の絶頂に立てる耶蘇基督に結合し其の力を受けて之を爲し得べしと。これドラモンドが科學の光に照らし、多數の人に接したる實驗に原きて、明に觀じ明に説きたる所の福音なり。

ドラモンドにつきて語るべき所多し、然れども姑く彼に別を告げて、こゝは倫敦を距ること西北七十餘哩なるラグビー學校の禮拜堂を訪れしめよ。堂内に在る學生はいづれも我が國の中學生と同じき腕白盛りの年齢なり。其の中には校長の長子マシウ、アルノルドも

在るなり、將來の「ダイイン」スタンレイも在るなり、「ラグビーに於けるトム、ブラウン」の著者も在るなり。こゝに一代の偉人なる校長トマス、アルノルド（二七九五—二八四二）が其の長大なる軀を起して壇上に立ち、祈禱終りて後彼が讀むを好めるヨハネ傳の終の數章のうちより、もしくは詩篇第十九第七を朗讀し、さて語り出づる所は何事ぞや。其の説教は大抵二十分を越ゆると少く、必ず新しく準備せられたるものにして時として墨汁の未だ乾かざる者あるなり。彼も亦ドラモンドと同じく誘惑に對して警戒し、戰て之に勝つことが丈夫らしきことなるを説く。曰く『墮落したる人間にあり得べき勝利は無罪にあらすして試煉せられたる徳操なり』。曰く『余は勝を得る

ものは福なりとの大なる真理を把持す』と。當時おしなべて學校内の風紀甚だ亂れたる時代なりしかば、アルノルドは此の頽風と戦ふ爲に非常に苦心せり。『無邪氣にして有望なる少年學校に來り、其の品性を強くせられ改善せらるべき場處に於て、周圍の誘惑に化せられいつしか腐敗に陥るを見るこれ最も心に苦痛を與ふるものなり』と云へり。彼は此の誘惑と腐敗の力に勝たしむるために如何なる動機に訴へしやと云ふに、一は學生の自重心に訴へたり。彼は學生をば學生として待遇するとともに又將來クリスチャン、マンたるべき學生として待遇すと云へり。曰く『此の學校には必ずしも三百人の學生百人の學生あるを要せず、たゞクリスチャン、ゼントルマ

ンの學校たるを得ば足れり』と。アルノルドは又公共心に訴へて學生を引き上げんと勉めたり。小は一學級の名譽を重ずる精神より大は國家と教會を愛し、教育を受けたる者が社會に對して負へる責任を感じる念に至るまで、すべて大なる團體の一部分たる自覺は彼が極力喚起せんとしたる所なり。アルノルドは熱心なる愛國者なり、スキヂデースの愛讀者なり、羅馬歴史の著者なり、希臘羅馬の英雄が祖國の爲に經營し戦ひたる崇高なる精神は彼の感嘆措く能はざる所にして、基督教の洗禮を受けたる勇士の徳を鼓吹したり。故に學科に於ては歴史の教育を以て最も重要なる科目となし、學校の管理に於ては、シキスフオーム第六級と稱する上級生をして全校の學生に對する責任を

負はしめ上級生を透して全校に個人的感化を及ぼす方法を取りたり。彼は又學問の尊貴なること真理の重すべきことを教へたり。一人の學生に與へたる書翰に曰く『豊富多趣味なる智識を良く咀嚼し良く配合して之を神の靈光に浸したるもの之を智慧と云ふ』と。

トマス、アーノルドの説ける宗教は以上の者より離れて別に存在せるにわらず、學生の丈夫的精神、自重心、公共心、學問を重する精神、すべて此等のものの中に活動し、此等のものの根柢となるべきものなり。此の如き力となり得べき宗教は、正直なる宗教にてあらざるべからず。故にアルノルドは學生の宗教は幼稚なるも可なり、宗教の言語思想に狎れて輕しく之を用ふるは最も危険なることを

教へたり。アルノルドの説ける宗教につきて批評するを得ば、そは宗教と教養とを相近くるに過ぎて兩者のけいご際め明ならざりし點にありとや云はん。其の子マシウ、アルノルドが宗教を以て一種の教養となすに至りたるも由る所なきにあらざるべし。然れども今之を論ずるに違わらず。寧ろこの偉大なる教育家が高調したる精神は今日の我國に於ても大に要する所實に缺けたる所なるを思ひ、此の如き人物の出でんことを望まざるばならず。

ラグビーの偉人の説き盡くさざりし教の堂奥に參せんとて、カアライルが『平和勤勉の聖堂』と賞賛したる此郷を去つて、神秘の關

静なるオクスフォードの聖メリーの禮拜堂を尋ね日曜日の午後四時より開かる、ヘンリー、ニウマン（一八〇一—一八九〇）の説教を聴かしめよ。見渡せば夕日の光晝窓よりさしたる此の歴史的會堂の内、其席は半よりやゝ多く塞りたるに過ぎず。先づ聴け説教者が聖書を讀む音聲の銀音を帯びて如何に麗さかを。然して後口を開いて徐に説き出づる所を聞けば、舊き眞理は如何に新しき意味を帯びて我が心に泌み來るや、靈性の最も奥深き處に指を觸るゝや如何に柔にして且つ力あるや。（ヂエー、シー、シエルプの文章に據る）。静なる中にも一道の生氣鬱勃として鼓動しつゝあるを感せずんばならず。先づ掩ふべからざるは時代の風潮に對する反抗の精神なり。曰く『余は余の確

信する所を語るを禁ずる能はず、此の國の宗教が今日よりも一層迷信的に一層頑固に一層幽鬱に一層猛烈にありたらば國の爲め利益ありたらんものを』と。又曰『愛することを學ぶよりも先に惡むことを學べ』と。ニウマンは特に學生生活に於ける宗教として之を説きたるにあらざれども、共に此精神を説くに足る人は未だ俗流に沈まざる青年の外に求むべからざるを知れるなり。彼は又宗教なるものは漠然たる感情にあらず、確として則るべき標準あり又仰ぐべき權威なかるべからざるを説く。曰く『十五歳の頃より教義は我宗教の根本原理にてありき。一個の感情たる宗教は余に取りては一の夢なり虚偽なり。父なる事實わらずば親子の愛あり得ざる如く至高の存

在者なくして敬虔あるを得ず』と。明なる教義の旗幟を樹て、時代の精神と戦へとは、是ニウマンが自ら陣頭に立ちて同志の青年を鼓舞したる聲なりしなり。

ニウマン曰く『神存在すてふ信仰は余に取りては最も多大なる困難を以て包まれながら最も大なる勢力を以て我等の精神に入り来る信仰なり』と。然りニウマンは眼を閉ぢて種々なる疑惑や信仰の困難を觀取せざるにわらず。神の存在てふ至て簡單なる教義にさへ幾多の困難あるを了解せり。困難あるを認めながらも一度此信仰に達するや彼は此の根本的の信仰に原づき總ての事を解決し總ての事を支配し總ての事を改革せんとして戦ひたり。學生時代は研究の時代

なり疑問の時代なり。其の宗教にも亦研究なかるべからず、疑問なかるべからず。研究し疑ひて後一片の信仰に到着すれば、其の信條は單純なるも可なり、否單純なる最も可なり、之に據りて立ち、之を明にせんがために煩悶し、之を世に行はんために戦へよ。ニウマンが自ら撰びたる墓碑の銘の一句に曰く

影より出でて現實に來れり

と。一生の終に於て己が墓石に此の一句を書き得るものとならんことは青年學生の志すべき所にわらずや。

清貞純潔の理想

一

海水浴場に往いて其處に游泳しつゝある青年學生の群を見るに、
 颯強なる體格を有する者多し。體育に注意せる結果として近年青年
 の身體の著るしく強壯になりしは喜ぶべきことと云ふべし。然れども
 又思ふに身體のみ是の如く發育して、一方に此旺盛なる勢力を清め
 之を静め之を澄まし得べき精神の養はるゝなくば彼等はたゞ益々動
 物的となる外なかるべし。況んや彼等を圍める風俗は清素端嚴なる
 情念を發動せしむべきもの絶えて之なきに於てをや。たゞ海山永へ

に清く月星夜々明なるあるのみ。是れ即ち一般社會の縮圖にあらず
 や。今や新秋の涼氣漸く天地に流れ入れり。寂寞たる校舎も荒草亂
 生せる運動場も今や復將に主人を迎へんとするなり。初めて大都會
 の空氣を呼吸する男女の學生も少からざるべし。此時に當り我等は
 我が愛する友に向ひて警戒せんとする所注意せんとする所一にして
 足らずと雖も、滿腔の誠意をこめて切に希望する第一の事は、諸君
 が清貞純潔の理想を懷抱して之を汚されざらんとなり。余輩は諸君
 の愛國心に訴へん爲に統計表の數字を擧げて如何に汚濁の毒流が滔
 滔として國民の生命を侵蝕しつゝあるかを示すとを得べし。余輩は
 又利害の念に訴へこの理想に思ならざることが如何ばかり活潑なる

精神氣力を銷沈せしめうら枯れたる生涯の悲劇を演ずべきかを指示するを得べし。然れども余輩は信ず此の類の說法を用ゐずとも、諸君の若き胸に宿れる血未だ濁らずば必ずや清貞純潔なる理想の引力に感じて波うちつゝあることを。我等をして此の青春の夢に訴へしめよ、明麗なる性靈の鼓動に觸れしめよ。

二

『白菊や目に立て、見る塵もなし』と、此一句實に清淨純潔を愛づる我が國民の趣味を咏じたるものと見るべからざらんや。然して白菊の白き色はすべての色彩を洗ひ落して之を得べきものにあらずして、すべての色彩の集りて生ずる色なるを知らば、清貞純潔の理想

も亦微妙なる集合の結晶たり調和の音樂たるを知り得べけん。夜明けて日東天に昇るこれ極めて單純平凡なる出來事なれども一度富士山の絶頂に立ち天地の間を排して躍り出づる極美の姿を觀たる者は復之を單純平凡と見る能はざるべし。單純なる理想の限り無き光彩を示さんとして詩人は歌ひ畫家は畫くなり。世には清潔なる生涯を送りつゝある人にして必ずしも此の如き理想感情に鼓吹せらるゝにあらずして小兒の如き心を以て之を爲しつゝある人もあらん。或は一の人倫なり義務なりとして之を守りつゝあるもあらん。或は又或人が金錢に淡泊なるが如く或る人が名譽の慾なきが如く性來性慾の點に於て淡然たるものあるべし。これ皆尊敬すべき人なり。然れど

も此等の人は未だ十分に自ら有する所のものの價值祝福を感ずるに至らざるが故に生涯に於て大なる損失を爲しつゝあるものなり。且つ知らず識らずの間に之を實行しつゝある所のものは之を精煉し蒸溜して透明なる理想となすにあらざれば、復た知らず識らずの間に之を失ふ恐あり。我等は清潔なる生活を營みて汚濁に染まざる青年あるを知る、たい願ふ處は彼等がこの單純なる徳の中に祝福あり榮光あり力あり生命あることを感じ、拳々として之を愛護し互に砥勵してこの理想を振起せんことなり。

三

之が爲めに余輩は清貞純潔の理想を懷抱し愛育して之を咏じたる

歐洲の大詩人の作を借りて這裡の消息を語ること以て益あるべしと信ず。ミルトンの『コーマス』は此の詩人の潔作の一なり。幾分は實際ありし事實に神話の衣を着せ典雅壯麗なる文辭を以て清貞の徳チエヌチチを頌したるものなり。コーマスは魔法遣ひの名なり、手に玻璃盃を携へ其の裡に甘き飲物を容れ、路に疲れたる旅人を誘ふて之を飲ましむ。この杯を傾くる者は

其の驗しほしの現るゝや否や神々に肖たりと知るまゝ人の姿は化りて
 狼、熊、豹、虎、或は鬚ある山羊などの獸の相となりすべて他の部分は原のまゝにて残るなり。されど其人曾て恥づべき様に變りしを悟らず、前よりも美しくなれりと誇りつゝ、友や故郷

を忘れ果て、淫慾の床に轉がるを樂しむ、これぞ禍の極なる。

これ即ち清潔の徳を失ひたる人の墮落を咏じたる者なり。

こゝに一人の妙齡の婦人暗夜連れに離れ道に迷ひて此の魔法遣ひの罟にかゝる。二人の兄弟この少女を尋ね行くなり。二人ともに少女の身を氣遣ふ心は一なれども、兄は妹の身に隠れたる一の力あればとて之を恃むなり。其の力とは何ぞや、曰く

これ清貞なり、我が弟よ、清貞なり。これ有る婦人は鋼鐵造りの鎧着たるに同じ。

聖き清貞こそかくまで天の嘉し給ふものなれ。心誠に然かあら

んには千の天使武裝して之にかしづき、罪咎を残りなく逐ひ退けて、清き夢と嚴なる幻をもて、汚れし耳には聞きがたき事を告ぐ。かくて天に住む者と語らふ度重なるに随ひ心の齋殿なる顔貌まで光照り添ひて自づと靈魂の粹に化り、すべて不朽不死のものとなる。

實に此の少女は清貞の威嚴、ミルトンが他の處にて太陽を被たる力 (The Sun-clad Power of Chastity) とたゞへたる力に護られ誘惑者の宴に於て其の魔酒を飲むことを肯せざりしなり。その中二人の兄弟は牧羊夫の形にて現れたる善靈に逢ひて魔術を解くべき効驗ある藥草を與へられ、コーマスの在家に探し當り酒宴の席に闖出して妹

を救ひ出すと云ふに終る。

ミルトンは清教徒の詩人なり、鐵騎兵の詩人なり。其の詩には鏘鏘たる劍戟の響あり。されば清貞純潔の徳を咏するにも亦徹頭徹尾戦争的なり。我が國封建時代の烈婦が死を以て節操を全ふしたる概あり。すべて徳の原く所は強健なる意志に存するを知らば純潔を全ふするの第一要件はミルトンの詠じたる丈夫的の操守にあるとは疑ふべくもあらず。これは骨なり他のものは肉なり。英國の健全なる生命は其の清潔なる家庭ホムより發することは人の説く所なるが、英人の家庭の理想は清教徒に負ふ所大なり。我等も亦彼等の質實勇健清潔なる氣風につきて多く學ぶべき所あるなり。

四

清貞純潔なる理想の、より柔なる他の方面に觸れんと欲せば南歐の詩人中の詩人たるダンテに往くに如くはなし。ダンテはフレンチエの都に育ちたる人にて徹頭徹尾大都の詩人なり。人或は思へらく田舎は清潔にして都會は汚れたり。これ未だ眞理の全般を言ひ現したるものにあらず。罪惡の機會は田舎よりも都會に多きとは事實ならん。然れども田舎の人が罪惡と知らずして爲すことも都會の人は罪惡と知つてなすことあるを思へば、罪惡物慾を超脱し得る刺戟も亦田舎よりも大都に多きにあらずや。歌舞の家カバに生長したる少女天主教の尼院に入りて黒衣に姿を更へたるもの此の東京にさへあ

りと聞くにあらずや。都會には田舎にはこれあり難き一種ローマンチックなるものあるなり。ダンテはそのローマンチックなる氣風の粹を呼吸し榮華風流の巷に生長して清貞純潔の理想にあてがれ、九歳の曉より依々脈々として胸底に流れ初めにし芳芬の情、忤悻の懷、之を養ひ之を澄まし、世路の巷に奔走して長くは之を亂されず、戀も軍も政治も皆終に此清絶美絶なる理想の炎を燃やす材となりぬ。意中の人は死に、愛する國土より逐はれ異郷に流離して辛酸骨に入るも、たのもしやよひ曉の鐘の音に物思ふ清韻幽情は衰へずして不朽の詩となりぬ。少年の血涸れ易く理想の夢覺め易し。昨日の詩人今日の俗人となり了る。かゝる人願くは『神曲』の煉獄篇第三

十章の如きを取りて之を讀め。もし冷灰一點の靈火を残すあらば必ず炎々として燃え立たん。清貞純潔の理想を愛するに於てミルトンとダンテは一樣なり。然れどもミルトンは大なる徳として力として義務として之を重んじ、ダンテは或る者に全幅の愛を献するよりして自からこゝに至る。『たしかに戀の主宰は善なりあらゆる賤しき物に心を向けざらしむればなり』と云へるこれなり。然してこの最上の愛を献する所は結局地上の美人にあらずして神の光にありしことは『饗宴』の篇に於て明なる處なり。

五

若し夫れブラウニングの『今一言』(One word more)の如き詩を

引き來りて人格の尊嚴深秘を觀する事の此理想を高くする所以なるを示すを得ば一層意を全くするを得べしと雖も紙面之を許さず。ただここに一言すべきはこの清貞純潔なる理想の淵源なり。我が國の神道にも、日耳曼民族の風俗にもブレト一の哲學にも儒教にもこの理想の片影はこれあらん。然れどもこの理想が眞に人類の生活を支配する力となりし其の源はナザレの耶蘇基督の外何處に求めん。基督の弟子ペテロの言へる如し。

汝等を召し給ふ聖き者に倣ひてすべての行を潔くすべしとは録して我潔ければ汝等も潔くすべしとあればなり。

日記中の自然

▲同じく水と空のほかには見る物なき大洋の上なれども、陸に近き海と陸を離れたる海とは景色自から異なり。山の見ゆるは明日か明後日かと云ふ處まで來れば、風の日は瀾次第に細く稜形を織りて、大洋の眞中の波の只うねりくとせるに異なり。入日の空の美しさも往くとき歸るときともに陸近き處にてのみ之を見たり。日は水平線を残して浮びたる雲の彼方に隠れ、雲は金絲をもて縁縫せられ、下にさしたる光は空と海の際を茜色に染めたるその景色の雄大にしてしかも濃麗なる、別なる世界に對する思して坐るに肅然たらしめ

たり。我はイーストルの夕初めて故國の火影を望み見たり。日暮れて陸は見えず、犬吠岬の燈臺の光回轉して紅の星隠れてはまた見えぬ。

▲房州の山は右に、三浦半島は左に我を迎へ、その林の色の豊ゆたかに潤ひたるを見れば誰が美なるかな此の山川との嘆を發せざらんや。蓋し我が國の自然の美は、水氣の多さに關すること多し。海周り山連り水氣集積して、草木繁り五穀良く實り花斷えず咲く美こゝにあり然れども氣候の良からぬ所もこゝにあり。空氣の乾燥せるは（過度に至らざる限り）如何に愉快なるものなるか親しく之に接せざるうちは想像し得べくもあらず。寒さ暑さともにきつき大西洋沿岸の

米大陸の部分に於て人をして之に堪へ易からしむるは空氣濕氣の少きとなり。夏の曉夙く起きて楡の樹蔭なき散歩すれば、面を拂ふ風の心地よさよ。軽くして彈力あり、颯爽として男らしく何とも云ひ難き凜然たる元氣を生せしむ。况んや金風林を拂ふ秋の日に於てをや。又見事なるは夜の空なり。油畫にて見たる如く深藍色に澄み渡りて星の光芒鋭く、夜の露袖に重きことあらず。思ふに空氣の水分の多少は國民の氣風に影響すること少からざるべし。今より我が國威益々北に暢びて、空氣の乾ける北海道滿洲樺太に住む人、生るる人多くなれば又自から異りたる氣風を生ずることあらん。

▲落機山ロッキイザンの大北鐵道にて越ゆるあたりは、西は傾斜急にして樹多

く、東は緩く垂れて千里の荒野に續けり。旅客の東より來るもの寢臺車スライピングカーの窓帷を掲げて野烟茫茫たる上に一痕の殘月淡紅の色を惜むを眺むる中七時頃汽車は早や落機ロッキイの大波の背を登りつゝあるなり。線路に沿へる小松原に粉雪積りてまだ深からぬをかき分けて野馬三四草を食ひつゝあり。或は削り立てたる如き岸に杉の樹の一面に生へつゝ一條の溪川の其の下を流れたるあり。伐りたふしたる材木に雪の積みたるあり。登る人も降る人も絶えて稀なる山間のステーションはプラットホームもなく出入口もなき小家寂しく立てるもあり。されどこの道中の絶景と云ふべきは絶頂サムミットの驛より少しく西に下りたるあたりなり。小からぬ溪流藍色をなして瀦あかみさしたる砂の上

を流れ、その前岸は杉檜の林にて鬱々森々として少も他の木を雜へず。林を隔て、遙に彼方には絶頂の峰左右に岐れ端然として過ぎ來し空に聳ふ。其單純にして崇美なる、畫ならばラファエル、詩なればミルトン杜子美の如き境界なり。之に對する時紛々たる人間の是非しばらく思想の水平線下に没するを感ず。落機山を経て面白く覺ふるは、人が次第に自然の王國を押領して、二三年前には無かりしステーションや村落の其處此處に開け行く有様なり。いづれも林を焼き拂ひて其の跡に家を建てたりと覺しく、二三尺の切株はその儘にありて、郵便局、麩包屋、飲食店、會堂、銀行等その間に建てられ新しき社會は形造られつゝあり。このあたりに來る人は大抵伐木

を業とし、遊びに来る人は多く魚を釣るなり。

▲我が尊敬する亡友市村竹馬氏去年（明治卅七年）の夏ペンシルバニア及びメリイランドの田舎に遊び目撃したる田舎の生活を報じた手紙の一に曰く『メリイランドに入りシルヴァーリンと稱する處のハートマンといふ牧師の宅で一晩泊つて來たが僕は米國に來て、否生れて以來まだこんな幸福な家庭を見たとはない主人は幕下の角力取のやうな容貌をして眞に角力取のやうに壯健で十五才を長に四才を末に七人の子供を持つて居るがいづれも皆極めて壯健で殊にその四人の男子は毛矢村六助の子供の時もかくありしならんと思はるはと丈夫だ妻君は瘦せ方であるがいかにも上品な美はしい顔をし

て七人の子供の世話に屈托して居るやうな風は毫も見えぬ。家族一同嬉々として喜悅に満ちて居るハートマンの牧する教會員はこの近傍五十一哩の遠きに至るまで散在して居るこの地方の農民で會員五百八十人とのことだ而して此の地方の農民は平均一戸四十町歩づつのファームを有し其の所有十町歩に過ぎないものは百姓といはれぬといふことなればかゝる大百姓の會員六百人を有する教會は確かに充分の給料をハートマン氏に與へてあるに違ひないそこでハートマン氏は衣食住につきては何の心配もいらぬ而して土地はどうかといふと人口極めて稀薄でファームの向に所々森々たる樹林を有するメリイランドの丘地の殊に高燥なる位置を占めて其附近に群れる家數

は二三十軒に過ぎない鐵道も通じて居らねば電車も通じて居ない空は極めて清淨で一本の塵も飛びはしない子供等に對して何の誘惑もなければ隣りに一人の不信者も無い實に幸福極まる田舎牧師ではないか日本に持つて行けば千圓には確に賣れると思はるゝ肥馬を有して何處へ行くにも馬車で行く家のまはりに畠もわつて野菜も菓物も作つて居る君よ米國の田舎牧師は實に氣樂なものぢやよ』

手織着物の時代

ブシチルの生涯の一斑は卷頭の一文に語り置けり。此の篇はブシチルが一八五一年八月故郷なるマサチユセツト州、リツチフ井ルド郡の百年期祝會の席にてなしたる説教にして、其雜著『ワオルクグデンドブレ勞働と遊樂』の内に收めらる。ロポルトソン、ニコルの如きは之を稱賛して、英語を以て書かれたる最も風情に富める文章の一なりと云へり。文長ければこゝにはたゞ其の一部分の抄譯に止めざるを得ず。

舊約の箴言の三十一章にレムエルと云ふ國王のことが載つて居

る。このレムエルは王と云つてあるけれども實はカルデアの或る種族の酋長ぐらゐのものであつたと思はれる。箴言の此の章はレムエルの賢明なる母が其の子に與へた訓誡を歌の體で書いたものであるが、別けても理想の佳人即ち我が子の妃に立つべき、婦人はかう云ふ風でなければならぬと云ふことを委しく述べてある。これは大分王母自身の暮しの様子を手本にして寫生したものと云ふ思はれる、其の中にかう云ふ所がある『かれ手を紡車いとぐるまにのべ、其の指に紡綫つひを執る。彼は家人のために雪を怖れず、そは其の家人皆蕃紅くれないの衣を着ればなり。其の夫は其の地の長老とともに邑の門に坐するによりて人に知らるゝなり。彼は細布の衣を製りて之を賣り、帶をつくりて商

買に與ふ』。外の點は姑く措き、何しろ此の婦人は節儉な忠實な妻であつて、家族の着る物は皆自身に製つて着せたと見える。實に幸福な家族生活の中心となつて居る。それ故に子供たちも皆之を尊敬して『その子等は起ちて彼を祝す』と記されて居る。

諸君のうちには之れを讀んで王妃とも云はるゝ人の暮しとしては餘り質朴で寧ろ平凡に過ぎはせぬかと思ふ人があるかも知れぬ。けれども段々歴史的に考へて行くと此れは身分もあり品格もある婦人を寫した畫であると思ふことが分る。社會のまだ開けぬ時代には人は皮の衣を着て居つたものである。それから紡いたり織つたりして着物を造るやうになつたことは社會の一大進歩であつて、それまで

は大分時がかゝつたものである。それで其の時代では婦人が毛を紡いで着物をこしらへると云ふことはなかく上びた藝であつた。ホーマーの詩の中にはアルカンドラがヘレンに黄金作りの絲車や毛絲を進物にしたことが詠じてある。自分の記憶に謬りがないならばアウガスタスが榮華を極めて居つた時分でさへ皇后リヴヰアの作つた衣服を着て居つたと傳へられてある。

遠い昔の話しを聴くにつけて諸君の中多くの人は我々の國の歴史にも同様の歴史があつたことを追懐せらるゝであらう。諸君は絲車と機を覺えて居らるゝであらう。我がリツチフヰルド郡の人民も大分近き頃までは手織の着物を着たものである。十人が十人までさうで

はなかつたとしても例外は算に入れなくてもよろしい位である。それで私の題目をそこから取つて見たいと思ふ。織の歴史は世界の歴史である、道路の歴史はいつも商業及び社會的進歩の眞の記録である。人のよく云ふとであるが、私は手織着物と云ふ品物を題に取るならば過ぎ去つた一世紀の模様を最も有力に又最も眞實に印象させる事が出来るかと思はれる。

勿論題目は田舎染みて居るけれども段々に話が進めば相應の品位も加はつて我々の高い志アンビション望をも満足させる事が出来るかと思はれる。私は絲車や、機の事ばかり云ふのではない、つまり之れを中心として我々が紀念する時代の模様を活かし、我々が尊敬する處の單

純で信仰の厚い徳を傳へんとするのである。

私が云つた如く革の着物の時代から織物の時代に進んだのは社會の一大進歩であつて其當時は紡織の技藝は一種の美術ほゞに思はれたのである。其の次の著しい進歩は手織着物から機械織の着物に進んだ事である。これは機械の進歩と内外貿易の發達とから來た事で、我々は今此の過渡に際して居ると云ふよりも大抵之を経て了つたと云ふべきである。かく母娘力より水火力に移つたのは中々大なる變遷であつて、家庭の生活社會の風俗は之に伴ふて一大革命を生ずるに到つた、此變遷には惜むべき事もあらうが、好ましさ事は更に多くある。昔の單純は取り去られたとしても、一方には開化、文

飾の道が之によりて開られたのである。唯一つ重なる危険と云へば手織時代の素朴なる需要を取り去つたと共に、嚴格なる徳義と、質素であつて、然かも深く誠なる信仰を取り去る事である。實に此時代の勝れて居つたは此信仰であつた。然し善にもあれ惡にもあれ、有望にせよ失望にせよ、新らしい時代は來つたのである。既に事實となつた以上は結果が之に次いで來たらねばならぬ。我々が小供の時分に聞き慣れて居つた糸車のブン／＼云ふ音は最早聞く事は出來ぬ。考古會の陳列場を見に行つた娘さん達は、これは抑も何と云ふ機械であるだらうと問ふ位である。百姓家の一室を占領して居つた機は大き過ぎるから、陳列處にさへ持て餘さるゝであらう。草の上

に長い木綿を晒らして丈夫な娘の子が炎天に曝らされながら、水をかけて居つた景色は小説や昔の歌の本の挿畫でなければ見られぬである。荒削りの板葺を打つてあつた單純な褐色に塗つた會堂は追々山の上から降りて瀧や、鐵道の近邊に出來た都會に移されるであらう。祖先が眠つて居る古い墓地は寂莫なる場所に殘されて今よりも天に近く。世間に遠く生活した時代の名殘を留めるであらう。

社 交

手織時代には今日社交ソサイチと名づけ得るものはなかつたのである。當時に集會と云へば冬の火の周圍に集つた位のものである。ストーブでなくて爐の中でパチ／＼燃えて居る火である。黄昏時たそがれになると家

族は次第に其周圍に引き寄せらるゝ。其中に人の好い隣人や、其細君が加はつて爐邊の圓環は大きくなり初める。次ぎには村はづれの若者が元氣よくやつて來て椅子の楔を打込むのである。さうすると小山の上から老幼を満載した櫓が着いて環は益々膨脹する。火からは段々遠くなる。客が一人増せば薪も一本づつ増すと云ふ風で、爐の火は益々元氣よく燃えて居る。遠慮と云ふものは少しもない。氣取ると云ふ事も無論ない。話が初まる、笑ふ、歌ふ、若者は頻りに何か遊んで居る一方では老人達は前の日曜の牧師の説教に就て六ヶ敷い神學の問題を論じて居る。此頃は新聞が無暗に増して道徳を害する事少なからずなど云つて居る。其中妻君は胡桃や林檎の御馳走

を出して来る。餘り詩的でない酸ばい飲物も運ばれる。其中室の隅に坐つて居る丈の高い時計がいかめしく九時を打つと話は二分眞面目になつて来て、一つ祈をして分れやうでないかと云ひ出す。かくて恭しき喜びの相が人々の顔に現はれて、別れを告げるのである。手織時代の社交と云へば大體此の様なるものである。

結婚と家庭

手織時代の結婚のことを今日に比べて見ると、其の時分は通常今よりはモット早く縁組をする。これが重なる相違である。何も昔の人が今の人よりも小説的の氣風が多くて用心が足りなかつたと云ふ譯ではなく、女は其の夫の稼ぐ助をする爲に神様から與へらるゝも

のであつて金を費す助をする爲のものでないと云ふ、古風でしかも天然の美に近い原則が行はれて居つたからである。それ故に牧師たるものは結婚を司る時に女と云ふものは男子の補助者たるために與へられた者であると云ふことを何時でも力を籠て言ひ聞かしたことを私は記憶して居る。此の地球上にこれよりも美しい感情の現れたものがあらうか。まだうら若い妻がまだ強くない夫に身を與へて夫を強いものにしやうとする、夫と諸共に人生の苦戦に飛び込んで行く、若し失敗すれば一緒に不幸のなかに臨んで行いても離れることはせぬ。若し又立身もすれば一緒に立身して倍する喜を分つのである。彼等の愛情は思慮と云ふ堅固な肋骨の下で鼓動して居る、決し

て愛情が薄いと云へる理由は無い。精神の表面に小説的に浮いて出て来るのは感情の泡であつて、心底の現實に徹するのが本統の情である。手織時代の紳士は其の妻を以て休日の遊び仲間と思はず助けの天使として之を信じたのである。小説的の所を初めの中に費してしまはず小説は終りの方で表れて来ることになつて居る。これが今と大に違ふ所である。それから手織時代の寫生には

學 校

のことを漏してはならぬ。子供は誰も彼も手織着物を着て居る。暮し向きの差ひは善く洗濯の出来て居るとさうでないで分るが、或は甲は白縞の綿布を着て乙は褐色の太布を着て居ると云ふやうなこ

とで分る、學校で焚く火に用ふる薪はさうするかと云ふと、大凡子供の数に應じて家々から運んで来た。そして誰はどんな木を持つて来たと云ふことがとき／＼子供の喧嘩の問題となつた。その時分には空氣の流通が悪いなどと云ふ苦情はなかつた。大きな一把近くの薪がくべてあつても之が良く燃える位の空氣は自由に窓から漏れて来るのである。薪が足らぬやうになると年上の生徒を折々近邊の林へ木を伐りにやることもある。椅子と云へば木伐り場から其のまゝ持つて来た皮づきの板へ斜に脚を打ち込んだもので、其の面は擦て之を磨くと云ふ氣長い話であつた。私はまだ記憶して居る（これが私の記憶して居る一番舊いことかも知れぬ）その低い椅子（低うて

も足は之に届かなかつた)や、又抑々初めて熱心と云ふ感念、力と云ふ感念を起さず伎倆を持つて居た懇な先生を記憶する。此の先生は今猶は存命せられて居るが、私は此の人のことを懐ふ毎に、頭に七の星を戴いて居るやうな立派な姿を以て記憶の背景から浮んで來るのである。私は其の人が存命して居ると申したが存命して居るところでない。現在この席に居らるのである。神よ彼を祝し給へ。ここに集つて居らるゝ諸君の中には私と同じ尊敬の念となつかしい満足を以て手織時代の小い大學即ち諸君の心の誕生した處を追懷せらるゝ人が少なからぬであらう。學校から

教 會

に移るならばこゝにも亦剛健なる手織時代式の禮拜を見出だすであらう。會堂は多分三つ四の谷の真中に在る小山の上に立つて居つて四方の種族は禮拜の爲にこゝに上るのであるが、雪の深い日などは文字通りに『力より力に進む』のである。ストーブと云ふものはない、たゞ足温めの火鉢があつて隣家から火を持つて來て入れる、これはまあ婦人だちに對するお愛相であつて、又時々は實際必要でもあつた、集つて來る人の衣服は勿論大抵手織であつて、身分の相違によつて僅ばかりの差別があるばかりである。席順は老幼の序によつて定めらるゝ。幾多のレムエル王御夫婦は演壇の前の處にチャンド坐つて其後には少レムエル君が順々に威儀を正して深き思想と

靈なる消化に耽つて居る。たゞ執事サン達は講壇のま下に坐つて垂直線的に説教を聴くの名譽を有して居る。二階の前面には奏樂班が一行に居列んで居る。講壇の上には反響板サウンディングボードと云ふいかめしい木造の天蓋があるが、子供が説教の深秘が解りだすまで第一の深秘で研究の主題となるものはこの天蓋である。

禮拜には眞面目らしく氣取つた所、形式的の所は少しもない。形式が餘りなさすぎると云ひたい位である。集つて居る人は随分硬い説教でも消化し得る強健な胃の腑をもつた人であつて、論旨に關係のない小刀細工を必要であると認めぬ。實質のあることであれば重くろしいとは思はぬ。主意を言ひ盡すまでは會て長いとも思はぬ。

牧師は大きな外套、厚い手套もので説教をして居る、凜冽たる冬の風は新鮮な空氣をたつぷり吹き送て頭の髪は動いて居る。けれども牧師が良き運動を興へてくれさへすれば皆満足して居る。彼等の四角張つた六かしいと云ひたい顔の下で大思想が醗酵して居るので之が爲に寒いとは感せぬ。曰く自由意志、曰く豫知、曰く三位一體、曰く贖罪、曰く特殊の恩恵、曰く永遠、何でも高大なる題目を興へさへすれば、彼等の内なる人は強固なる筋肉を以て根氣よく攀ち登るのである。何でも考へる題目を興へられて歸れば善い事を聴いた日であつたと喜ぶのである、手織時代の堂々たる人物に取つては宗教は實に重大な事柄であつた。

彼等の信仰には厳しい所があつた、優雅な感情が乏しかつたに違ひない。彼等の基督教的氣品は煉鐵のやうなものであつてリン／＼たる響を發するものであつた。其の氣象が厳しかつた代りに能く人生の嵐に堪へて、其の家族や仲間のものに對しても今より溫和にあつたとは云へぬが神と宗教の觀念を本統に保たせることは今日に劣らなかつた。彼等の宗教的生活には嚴格過ぎて我等が之を修正し和げなければならぬ所があるにした所が、我等をこしらへてくれたものは彼等であると云ふことを知らねばならぬ。それから我々が後世子孫のためにモット善い事をした曉に我々は初めて昔の人の嚴格過ぎたことを非難し得る權利を生ずるであらう。

イーストルの喜び

イーストルは基督の復活を記念する祝節なり。年によりて其の日に早晚の差あるは大陽曆の何月何日と定めあるにあらずして、毎年春分後の満月の次に來る日曜日に當るが故なり。何故に斯の如き計算の仕方を用ゆるかと問はば、基督の甦り給ひしは、猶太の踰越節イースターのいほひの當時にして、日は一週之首の日即ち日曜日の朝にてありき。然して踰越節は猶太曆のニサンの月の半になりて恰も満月に頃イースターのいほひに當り、又ニサンの月は凡春分の頃より始まる故に、上の如き日順にて之を算するなり。即ちイーストルは踰越節と略ぼ同じき季節に於て

祝せらるゝことゝなる。然れども猶太の踰越節と基督教のイーストルとは單に基督が踰越節に際して殺され又甦り給ひしと云ふ偶然の關係に於て相繋がるのみにあらずして、基督自から踰越節の小羊の如く人の罪のために犠牲となるべしとの意を以て教へ給ひ、又自ら殺さるゝ時は踰越節にあるべきことを期したり。踰越節は昔イスラエル人が埃及エジプトに於ける大難を免れ得し恩恵を紀念し、イーストルは基督の死と復活とによりて萬民の爲に救贖の道を立てられしことを紀念す。されば兩者の間には曆日上の連絡あるに止まらずして、どもに神の國の建設せらるゝ大なる驛程を示せる紀念日に外ならず。又この日をイーストルと名くることは基督教が日耳曼民族の間

に傳はりたる後のことにて、この民族には古より晨の女神或は春の女神をばオスタラと稱へて春分の頃其の祭を行ふ風俗ありしを、基督教を信じて復活節を祝ふに當り其の名のみは昔より口にし慣れし祭の名を其のまゝに移し用ひてオストラ祭或はイーストル祭と名けしなり。自然を拜したる蠻族の春の祭が一變して靈界の春を祝ふ祭となりしも亦面白からずや。クリスマスは一陽來復の始なる冬至の節に行はれ、イーストルは花咲き草萌え出づる春分の頃に祝はる。かくて此の二の祝節は千代經し歴史の餘香を帯びたる上に、四季の風物の移り變るに和合して靈界の光を地上に染め限りなき味を人事に加ふるものとなりぬ。昔の風俗にては都なれば其の前夜は滿都盛

に火を點じ萬燈燦然として晝の如く、夜半となれば手に手に炬火を携へて行列を造り會堂の周圍をめぐり然る後會堂に入りて夜の明くるを待てりと云ふ。洗禮の如きもこの日を書き行ふことありしと見え、アウガスチンの如きイーストルの日洗禮を受け、會衆が歌ふ讚美を聽きて坐るに涙禁じ難かりしとを『告白書』コンファッション中に記したり。グーテのファウストがイーストルの晨に響き渡る鐘の聲を聞きては、望と喜びの涸れ果てたる身にも流石に懐かしき昔の我のしのばれて、手に執りし毒杯を擲ちたりと云ふ良く知られたる一節を見ても、如何ばかりこの祝節が基督教國の生活の絆となれるかを想ふべし。舊き歴史を有して猶ほ且つ永に新なる意義を含蓄し、宛かも昔

の名匠の鑄成したる洪鐘が晨夕あしたゆうべに清明なる響を送るに似たるは、基督教會に傳はる禮典祝節の特色なり。千載の歴史と胸底の經驗と脈絡相通ひ、自然の風物も我が幽微なる渴仰の念を鼓する樂器となり、天地我に親しきの思はこの祝節に逢ふて鮮に感せらるゝにあらざるや。

然れどもイーストルの美しき所以は歴史の苔を着けたるが故に美しきにあらざることは、未だこの歴史なき其始の歴史の美しきによりて知らるべし。世に死者の甦りたりと云ふ類の話はいづれも怪異の分子を含まざるなく、人の恐怖の情に訴へざるもの希なり。獨り福音書に載せられたる基督の復活の記事の如何に單純質實にして平

和の色溢るゝばかりなるを見よ。かのエマオの村に行く夕暮の途中に二人の弟子に現れ彼等に引き留められて旅亭に客となりし光景の如何に自然なる。之に就きて憶ひ出づるは詩人テニソンの言なり。テニソン晩年に其姪なる人を携へて愛する丘の上を散歩する中、眞摯なる調子を以て語て曰く、『卿おんみと今かく歩む中にも神は我等と偕いに在いますなり。聖書に見ゆる如く昔二人の弟子がエマオの村に行く路すがら心づかで基督と同行せし例ためしもあり。今も目にこそ見えざれ父にいまし救主にいまし聖靈にいます神は、其昔よりも或は更に近く、信ずる我等とともに現在し給ふならん。今かく卿と偕いに在いまるごとく基督と偕いに在いまることを思へば、我が心の喜びは如何ばかりぞ

や』と。神我と偕いに在いますてふ深長なる眞理をば最も明白に教ゆる事實はテニソンが引きし話に如くものあらんや。又ガリラヤ湖上の黎明あけがたに漁りする弟子等に基督の現れたる一章を讀め。基督生前の歴史に於ても其の懇篤深粹なる愛を表現すること之に比すべきものあるか。予輩は如何にしても此等の記事を以て架空なる記事なりと想像すること能はず。新の如く平心なる調子を以て小説家の想像も未だ及びしことなき大膽なる歴史を寫し出づる記者の眞實をば如何にして打ち消さんとするか。

最初のイーストルの晨弟子の喜び如何なりけん。然れども弟子の喜を想ふとともに基督の喜を想はざるべからず。否な弟子の喜びは

寧ろ基督の喜の片破れかたわに過ぎざるべし。予は斯る事を言ふを危ぶむと雖も、猶ほ之を思へば無限の味を感ずる一片の思想を語らしめよ。基督の世に在るや敵は八方より彼を覗ふあり、枕を安すべき地なく、前途には十字架の横はるありて、『其の成し遂げらるゝまでは我が痛みいばかりぞや』と云ひ給ひし其の苦衷想ふに餘りあり。然るに今や十字架の苦難は既に受け終り神より託せられたる使命は之を果たし、肉體の桎梏も亦之を脱せり。斯の如き状態を以て今暫くこの世に留りて弟子と交通し、之を教へ之と食を偕にし、特に住み慣れたるガリラヤの故郷に歸りて幾多の追懷を留むる其の江山の間に弟子と數日を送りたる其の平和、其の満足果して如何なりけ

ん、若しかゝる事に喩ふるを許さば、學生が苦しき試験を卒り將に故郷に歸らんとするに臨み猶ほ暫くの間塾舎に留りて同窓の友と平和なる日を送る其の樂しさは幾分か之れに比ぶることを得むか。父なる神は基督の大なる苦難の後に特にこの喜しき時日を興へしならん。

基督の喜びは弟子の喜びとなり、弟子の喜びは再び起つて教を世界に宣べ傳ふる力となり、天下萬民に稱へらるゝイーストルの喜びとなりぬ。

近世思想と罪の觀念

英國の宗教界に一時の波瀾を捲き起して議論の中心となつたアー
ル、ヂエー、カムベルの『新神學』^{ニウ、セオロヂー}は其の思想が深いとは云ふこと
ができぬ。新時期を劃するほどの力のある書物であるとは思はれぬ。
しかし文章が雄健で思想が明快であることは之を讀む人の誰でも許
す所であらう。流石に『シチイ、ラムブル』の會堂で幾千人の會衆
を相手にして居る説教者であるだけに、學究的の臭味が少い、ラン
プの香が付いて居らぬ、反響を帯びた文字である。初の章には其れ
が良く現れて居るが、讀んで第三章の『惡の性質』といふ處になる

と余輩は失望せざるを得なかつた。それは著者の意見に同意ができ
ないからではない、それは別の問題として、思想の明快透徹と云ふ
ことがこの章には更に現れて居らぬ。つまり十分此問題に觸れて居
らぬ心地がする。『惡は積極的の辭でなくして消極的の辭である』。
『惡は善と戦ふて居る原理^{プリンシプル}ではない』。『之をして惡が此の宇宙には
いつて來たかと云ふことを尋ぬるよりか、我等は最も有限のものな
らば惡なくして存在することはできないと云ふことを認識すべきで
ある』などと説き去つて居る。それなれば罪^{シン}と云ふものは之を云ふ
ものであるかと云ふと『罪は實際生命を求むることである。たゞ間
違つた方角に之を求めたのが罪である』と定義を下して居るが、讀

み來つて談何ぞ容易なると云ふ感じを起さざるを得ない。少くとも罪を犯して居る當人でも罪をこのやうなものと思へて居らぬことは事實である。罪の記憶に由つて懊惱煩悶して居る人にカムベル氏の罪の説明を聴かせたらば彼等は安心するであらうか。[○]ををもそうは思はれない。そんな甘い説法を聴くよりか偉い小説でも讀んだ方が寧ろ深刻な問題に觸れて居ると云ふであらうと察せらるゝ。要するに罪の問題に關しては著者の思想は餘り振て居らぬ。これと云ふのも著者がこの重大深刻なる宗教の問題の解釋を試みるに當つて吾人の宗教的經驗を基礎としないで、一種の宇宙哲學、凡神教に近い哲學思想から割り出したから起つたことである。余輩は敢て神學から

一切哲學の分子を排除せよとは云はぬ。歴史的研究と云ふことを頻に言ふ人があるが歴史的研究が窮極の目的でない。誰れが如何に教へたか誰れの神學はををであつたかと云ふことを調べるのは、つまり今日の我等は如何に考ふべきか何を信すべきかと云ふ處へ行くに於いての必要な過程である。さうして今日我等の考へて居る處又信すべき處を系統的に組織しやうと云ふには、おのづから多少時代の哲學思想の影響を受けねばならぬ、科學の知識をも参照せねばならぬ。『自然と世界を解釋する學說思想はどんな種類のものでも故障なく軌轢なく透過せしめ得るほど網の目の疎い宗教的世界觀、融通の利く宗教的世界觀はあり得られやうと思はぬ』と近頃『自然主義

『宗教』の著者が論じて居るのは至極尤である。そこで余輩は『新神學』の著者が初から哲學思想を振り廻して居るのを見て、其の手續の程には聊不安心を懐かないではないが、間違つた道具を振りまはして居るとは思はぬ。それにしても苟も宗教神學の論を立てやうと云ふ人が最も重を置かねばならぬものは宗教的經驗である。之は何も今更新しふ云ふ程のとでもないが、リッチリアンのやうに内部的の經驗を單本位として押し通して行けば問題は單純であるが、上に申す通りをもちそれだけでも不安心である。今日の困難は主として此の點にあるが、罪の問題でも其通りであつてカムベルのやうに一種の哲學思想から割り出して罪を説き去れば造作もない話であ

が、我等の宗教的經驗はそれでは承知しない。又一方からは哲學とは云はぬにしても科學の方面からばかりでも罪と云ふ事を考へる際に參酌するを要する事實が續々提供せらるゝのである。されば此等の智識的事實にも應酬を怠たらないで、我等の持つて居る宗教的經驗に觸れ之を解釋することのできるやうな思想を見出すのが今日の急務である。

話が神學の講演じみて來て讀者諸君には御迷惑であるかも知れぬが此れは單に神學の問題ではない、カムベルの思想はたしかに罪に關して今日行はれて居る思想の一方の傾向を代表して居るもので、今日我が國の青年、基督教青年の間にさへそれと同様の考を持つて

居る人が少くないやうである。この思想の由來する所は久しいものであつて、種々の源から流れ出で居る。第一はライプニツ、ヘーゲルなどによつて代表せられて居る哲學の思想である。第二は進化論である。第三は物質的現世的の氣風である。其の外歴史的批評が進んで來て創世記にある始祖の墮落の記事でも必ずしも歴史的の事實として認められないやうになつた事なども一の原因に相違ないが主なる原因と云ふほどの事はない。此等の原因が相合して罪と云ふものは昔から神學者や説教者の教へたやうに深秘な恐ろしいものでない、已むを得ないもの仕方のないものであると云ふ思想を流行させたのである。先づ哲學思想に基いて居る罪惡必然論を概観すれば、

この世界を樂觀する所から罪を不完全と同一視する思想はライプニツに於て最初の有力なる代表者を見出したと云はれる。人は神の如く完全でない以上は其の知識と能力に於て不完全である如く道德に於ても不完全であるも亦已むを得ん事であると、それがライプニツの議論の大意である。しかしライプニツは必ずしも、惡は無くしてはならぬとは云はぬ、有つても仕方がないと云ふのである。人の罪は神の定めたとではない神の許容する所であると云ふことになる。ヘーゲルの思想は更に一步を進めて罪も亦必要であると説いて居る。惡とは何であるか、普遍的の善を以て自我を支配する原則としないで、己れと云ふことを以て原則とすることである。(これはカムヘル

の議論も同様である。しかし人は自然の裡に眠つて居る状態から起き上つて己と云ふことを自覺する時期を経過せねばならぬ『人は善惡を識る樹の果を食はねばならぬ、さうでない中は人は人でない動物である』。アダム、エバが罪を犯した事は昔から墮落フールと稱へ來たけれども實は進歩の一段階である。とこれはヘーゲルが『歴史哲學』にも説いてある思想である。日本にもこれだけのヘーゲリアンは随分多い様子である。それから進化論は見方によつてはこう云ふやうな考を助ける處がある。人は下等動物から進化したものであるとすれば罪と云ふものは進化の下層に居つた昔の名残ではあるまいか。ライマン、アボットが『進化論者の神學』と云ふ小さい書物に書い

てある如く『罪と云ふものは何も不思議な神秘的な事實ではない、人には二個の人がはいつて居る、神的なる人と人的なる人、地に屬する人と地以上の人とである、人は素と出て來た下層にも結び着きて、又さして行く上層にも結び着いて居る、我等は動物を脊負つて居るのである』それは科學の方面から出た罪惡必然説の一斑である。ヘーゲルの哲學のやうに罪が必要であると云はぬが必然であると云ふ所は兩者の一致する點である。それから學説の下に伏して居る社會の一般の氣風趨勢と云ふものが大なる影響を及ぼすものである。今日世界一般の氣風と云ふものは罪とか刑罰とか云ふことを深く考へるには餘りに樂天的であるので困る。富が増し快樂が増して人の

活動力は外界に吸収せられる、飽くまで自然の能力を發達せしめて盛に活動せよと云ふのが現世紀の福音である。昔の人のやうに内觀反省罪を責めて痛悔の涙に咽ふと云ふやうな気分にはなりにくい世になつた。つまり罪と云ふことを眞面目に考へるには少からず不利な時代である。

しかしながら以上に舉げて來た所の思想が近世思想の全體であると云ふことは出來ない。これ等の議論は専ら知識の方面から立論したものであつて、情意の經驗に照し合すと云ふことは考へて居らぬ。人が罪について持つて居る觀念即ち罪は自由の意志から出たものであつて我々は之に對して道德的の責任を負はねばならぬと云ふ

所謂「ギルト」の觀念を解釋して居らぬ。ところが近頃研究が盛になつた宗教心理學で調べた所でも、人には誰でも何所か悪い處があつて之から救ひ出されねばならぬと云ふ觀念がある。あらゆる宗教的經驗をせんじつめた所は此であることはヂェームスも『宗教的經驗の様々』と云ふ書物の結論に言つて居る所である。文學の方では近世の小説は人の罪と云ふことを深刻に考へ出したことはなかつた。一種の暗黒なる影は近世の文學を掩ふて居る。又一方にはカント以來思想界に流れて居る實踐的理性を重ずる學説は宗教的經驗の要求と相合してシユライエルマヘルの神學となり、リツチル派の神學となつて居る。カントは人に罪責ギルトの觀念のあることからして罪は

たゞ感官的の傾向でなくして自由の意志に屬するものであると云ふことを主張した。シユライエルマヘルでも罪と云ふことゝ罪の意識と云ふことゝ一に視て居る。罪の意識を主にして罪と云ふ事を考へると云ふことは、兎に角前に擧げた一派の忘れて居つたことであつたが茲に一の進歩を劃したと云はねばならぬ。罪の意識を主とする所はリツチル派の神學も一様である。内部的經驗を唯一の起點とする此の所の立場から云へばしかあるべき筈である基督教の與ふる罪の意識に質して見れば罪は必然であると云ふ答は得られぬ。それ故にリツチル一派の神學者は罪の必然と云ふとは説かない。それは大に見るべき點である。たゞ一つ困ることは罪と罪の自覺が一であつ

て、罪を知らぬ所に罪はないと云ふことになる。それは又餘りに主観的になる。知らなくても罪は罪であると云ふ處へ行くには道德律と云ふ觀念を憶ひ出さねばならぬ。

余輩は罪について新しい解釋を提供するでもなく又罪の思想將來を云ふやうに發展して行くか預言する積でもない、しかしこの問題は大問題であつて猶眞摯なる研究を積むべきものである。罪は不完全である必然の過程であることが近世思想であるなとと輕々に言ふべきものでないと云ふことだけでも明にして、讀者諸君とともにこの眞摯なる問題を考へる機會ともなるならば余輩の望は足るのである。

ガリバルディの片影

明治四十年七月四日『大英週報』に載りたる同雑誌の主筆ロボルトソン、ニコ
ルの文章を譯したるものなり。

今日はガリバルディの誕生百年期に當つて居るので、斯の人の名は多くの人の心に昔となりし記憶を喚び起さすことであらう。ガリバルディが英吉利に來た頃私は未だホンの小兒こゝろであつたけれども、當時此の土地を蓋ふて隅々隈々まで行き且つた熱心と興味とは今も私の追懷に残つて居るのである。我々の住んで居つた閑靜な村落で

さへも動かされぬ人なく、ガリバルディの話はいづれの家庭でも物語られた。其の頃はガリバルディの名のついた品物がいろ／＼できたが、とり別け赤色のガリバルディフルウズ上衣が大流行で何處の娘の子も之を着たものである。赤上衣の注文が夥しいものだからわざわざ仕立屋を都會の方から呼び寄せて、ガリバルディ屋と云へば名高いものであつた。

私はガリバルディの事を書いた本を読んだことがない。トレヴェリヤンの新著でさへまだ讀まぬ位であるから、先づ此の英雄の片影を傳ふるから上のことは出來ない。しかし私は又多年ガリバルディにつきて書いた文章などは力めて之を讀んだ。其の中で最も善く出

来て居ると思はれるのはヘンリーキングスレー、此の人は少時の間「エデンボロ日々評論」の主筆をした人であるが、其の人の書いた論文の中にこう云ふ一語がある、『ガリバルディ將軍は大愚物であるが、又同時に底の深い賢者である』。私もこれは歴史の斷案であると言ふを憚らぬ。兎に角ガリバルディには驚くべき魔力がある、この魔力こそは其の變化に富んだ一生の全局面を一貫して猶ほ存し、老境、退隱、死に至つてもこの魔力は減せなかつたと云ふに至つては、亦頗る研究すべきものがなくてはならぬ。

先づ時は千八百六十四年の四月ガリバルディが倫敦で受けた歡迎

の盛況を想ひ起して見たい。正にこれアイデアリズムが復興しはじめた頃ではあつたが、英國の民衆と云ふものは容易に外國人に興味を有せぬ。マチニイが來ても餘り頓着しなかつた。コッストにも幾分の注意を拂ふたに過ぎなかつた。然してガリバルディは凱旋の將軍ではなく、謀反をして打ち破られた處であつた。彼の抱いて居つた議論と云へば今なれば兎も角當時は革命論としか見えなかつた。然るに英國人の彼れに對する熱情は沸騰せんばかりであつた。彼等は此の人を了解した、其の物語を語つた、其の肖像畫を買つた、其の缺點を批評することを許さなかつた。要するに彼等はガリバルディを愛したのである。當時の記者の傳ふる所に據れば、當時

の歓迎はど「内幕」のはいつて居ないものはなかつた。政府は更に之れに關係にしなかつた。總ての事求めずして自然に生じたのである。

倫敦全市を擧つて街道に出張つたのである。やがて行列が通ると云ふと、ウエストミンスター橋上の田舎漢から俱樂部の窓に集ふて居る人達に至るまでとりくに評判することは英雄の風采であつて『如何にも王らしい顔ではないか、どをしてもこれは王である』と云ふことに歸着した。將軍の容貌のいかにも奇偉であつた譯から、或る人は歓迎の熱心は彼れの驚くべき風采と威あつて且つ氣品のある態度に由ることであると説明したはどであつた。

然し風采ばかりではなかつた。英國人民はガリバルデイがこれから取りかかろうとして居つた羅馬の自由、ヴェネチヤの政權回復、以太利を以太利人の統治の下に置く等の事に深遠なる同情を寄せたのである、彼等はガリバルデイに於て國民の自由と一致の爲に戦つた王者を見た。自由の思想があらゆる賤劣な欲望や下等な情慾を忘れさせた時はこれ實に偉大なる時である。ガリバルデイを批評して國と國との間に行はるゝ政略隱謀の解かる人でないと云つた人もないではなかつたが、サッカーは既に死んでサカレイズムの精神は既に衰へつつあつた。幾分の反對を表した批評家でも、ガリバルデイと云ふ人には個人的の同情を喚起するに足る事が具つて居ること

を承認したのである。彼は随分賢くない事をしたり、愚な事を言つたりした。しかしながら其の品性には結晶體の如く透明なるものがあつた、又其の愛憎ともに磊落であつて何とも言はれぬ人を引く力があつた、又ガリバルディが歡待の般な最中に英國を去つたことも頗るガリバルディ的であつた。彼は家に歸りたいと云ひだした。最早騒がるゝに飽いたのである。餘り長く群集の稱賛に接することは自身を害することを悟つたのはガリバルディの賢い處である。芝生もある庭水もある舊い貴族の邸宅を貸して上げるから、カブレラ島に居ると同様に長閑に休むやうにと勧めた。然れども彼は留まらなかつた。彼は船の行路を指して行かねばならぬ磁針は周圍の鐵の引

力に感せぬやうにしなければならぬ通り、自己の徳性を信頼して外界の勢力に妨げられぬやうにすべきとを知つて居つた人であつた。四方の壁に鏡を張り詰めて何處を見ても我が影しか見えぬ室に閉ぢこめられた人は遂に發狂したと云ふ話を讀んだことがあるが、彼は己の思想が来る日も来る日も我が身邊に繰り返さるゝに疲れ果てたに違ひない。彼はカブレラ島に歸つた。

二

殘生十八年は彼の前に横はつて居つた。此の十八年間の生涯にも随分浮き沈みがあつた。腸を斷つやうな悲劇（真相の全體の明白になる時はないであらうが）をも經たのである。實際彼は此の世を去

る數年前既に政治的には死んだのである然れども魔力ばかりは依然として残つて居つた。素性が良いでもなく教育があるでもなく偉大なる思想力をもつて居たでもない此の人が歐羅巴の民衆を魅し去つて一世紀の四分の一の間歐羅巴に於て歴然たる勢力となり、其顔を見たとのない數百萬の人に景慕せられ、赤貧の一士人でありながら私闘のなくなつた時代に於て一たび壓けば之に應じて起つ一團の軍勢があると云ふことは、何たる譯があるであらうと云ふ間は其の墳墓の上に横へられた疑問であつた。もしも千八百八十年に彼が聲言した通りにイルリヤに上陸したならば一萬人は彼に従ふたであらうし、日ならずして二萬人を得たにちがひない。ガリバルヂイの書い

たものは絶叫的であつて間違の多いとは誰しも承知して居つた。以太利の國會の議員としては討論立法政治の伎倆は見るべきものがなかつた。實際政治の事や歴史の事はサツパリ知らなかつた。ガリバルヂイの奇言は随分評判であつたが、中にも聖ペテロと云ふ人は無かつたなどと云ふ斷言に至つては當時有名なものであつた。これ等の事あるに關せずガリバルヂイの盛名は噴々として國々に轟いた。彼が死んだ時佛蘭西の議會は哀悼の意を表して議事を休んだ。いくら失敗をしても玷にならぬやうな何處となく氣高い又愛嬌のある所が此の人の品性に具つて居つたので、事去り人變じて今の年少い人はガリバルヂイの事は餘り知らぬであらうが、彼は歴史のペーヂの

上に生きて居るのである。

三

抑も此不思議な、この人を服する、この長く存する魔力の秘密は何處にあつたであらうか。

私は思ふに、一の譯はガリバルデイのした事は徹頭徹尾自身にしたことである。今時は何の仕事をするにも大仕掛で且つ込み入つた機關が必要となつて、仕事が出来上つた時には其功に與かる人が澤山にある。然るにガリバルデイばかりは全く獨立獨歩の人であつた。たゞ一圖に本能の向ふ處に往いたのである。或る人の評した如く壓制があると見れば彼は直に眞甲から一撃を試る、手當り次第の

武器を用ひて之を撃つのであつた。我に付き隨ふ者が少數であらうが多數であらうが機會が善からうが悪しからうが一向に頓着しない。敵が見えて居つて打ち合ふことが出来さへすれば遣るのである。戰に臨んで退くことは出来ない、手柄を見て辭することの出来ない人であつた。恃む所は右の腕一本と、目的の立派であること、それのみで世界の惡を滅さうとして出陣した古武士の風があつた。ガリバルデイは優しくて勇ましい、柔かで殿しい人であつた。幾度か失敗したし幾度か無名無用の戦争もしたし又幾度か世路に迷ひ疲れたが、凱旋の時とかはらぬ坦懐勇氣を以て之に當つた。大軍を以て科學的機械を以て大仕掛の戦争をする今日ガリバルデイのやうな

人は復と出ぬであらう。ガリバルディはガリバルディであつたまゝ、
で萬代まで傳はることであらう。

彼死するや何人も本性的に彼の偉大の要性は無私であつたことを
噂した。これは又實際疑のないことで骨折つて説くべき點である。
彼に優りて、心服した朋友、忠義なる門徒をもつて居つた首領は他
にないであらう。彼は甘言人を誘ふたではない、約束した所のもの
は損失あるのみ傷あるのみ艱難あるのみ。然るに其の口より發する
一言は、縦し死の顎中に飛び込むことであつても人は即座に之に従
ふた。彼の率ひた仲間随分雜駁な分子から成つて居つたに係はら
ず懲罰と云ふものは用ひなかつた、用ふる必要がなかつたからであ

る。彼が一切の私慾や名譽心や野心の上に超脱した人であることは
一人として知らぬ者はなかつた。彼が之が爲に戦ふて居つた事のた
めに精神の力は打ちこまれた。勝利は是れ即ち彼が受くる辛苦艱難
の優なる恩賞であつた。縦令負けたにしても戦ふとが出来ただけで
一の恩賞を得たのである。自ら平定した新王國を君王に献上して、
昔の羅馬の總督ゴクテートルの如く淡然としてカブレラ岩島の田園に退隱した。
彼は有名な赤襯衣ヒカシヤツ、如何なる軍服勳章よりも世に知れ渡つた赤襯衣
を着て以太利の新議會に出席した。同情もあり又分別力もある或る
文士の言つたやうに、彼は群集に取りてちやうどジャンダークが北
佛蘭西の農民に於ける如きものであつた、その偉いことは殆んど人

間以上で、恐ろしいと云ふことを知らぬ、狼狽すると云ふことの出来ない、又負けてしまふと云ふことの出来ない人物、しかも求むる所望む所としては全くない人物と思はれた。彼は驚くべき方法を以て驚くべき事を成した。以太利全土を脚下に踏みつけながら地中海の小島に瀟洒として生活した。

四

ガリバルディは初からさう云ふ人であつた。私の記憶に残つて居る一の逸事は書き留むる價がある。彼が南米に居つた時分の事であるが、彼は八百屋の店を開いて一艘の小舟をもつて、麥粉や果物や野菜を智利からポリビヤ、ペリウの港に賣つて居つた。一タリマの

ホテルの前に腰をかけて珈琲を飲みながら友人のサン、アルノオと話しをして居つた。此の友人は佛國の亡命者で音樂の先生であつた。ガリバルディはルウクレシヤ、ホルギアの樂劇は音樂の耻辱であるなど評して居た。馴々たる小才子と見ゆる一人の佛蘭西人がやつて来て横槍を入れ、女と云ふものはと云ふやうなことを喋り出した。ガリバルディは止めるやうに頼むだが馬鹿と云ふものは仕方のないもので、相手の何人であるか知らぬものであるから益々慥にも付かぬことを喋りだした。赤褌衣のガリバルディは微笑を湛へて之を制したけれども更に聽き入るゝ様子がない。ガリバルディは徐に立つて之を懲らうとすると、佛蘭西人は仕込杖から短刀を抜いて